

大黒屋光太夫書蹟資料一覧

——附参考写真——

岩 井 憲 幸

1 はじめに

筆者は年来大黒屋光太夫に関する資料とくに自筆にかかわるそれらを渉猟してきた。中間的な報告の一部として以下に現在知られている書蹟資料の一覧を記し、のちに各資料につき略述し、かつ若干の考察を述べる^{注1}。

2 書蹟資料一覧

一覧はほぼ年代順に通し番号を付し、光太夫の手になるか否か疑問視されるもの、および筆者未見のものも含む。28以下は年紀不詳。6・7・8の書き込みの大部分は光太夫滞魯中のものと推定しうる。

1. ゲッチンゲン大学図書館所蔵日本地図 Asch 284 (1789年・寛政 1)
2. 同上ジーファースの記念帳 (1790年・寛政 2)
3. 同上日本地図 Asch 285 (1791年・寛政 3 年)
4. 同上日本地図 Asch 286 (1791年・寛政 3 年)
5. 同上書簡 Asch 150 (1791年・寛政 3)
6. 旧レニングラード在浄瑠璃本等書き込み
7. ゲッチンゲン大学図書館所蔵浄瑠璃本書き込み Asch 151
8. 早稲田大学図書館所蔵『露国国民学校用算術入門書』書き込み
9. 国立公文書館内閣文庫所蔵〈皇朝輿地全図〉(1793年・寛政 5)

10. 早稲田大学図書館所蔵〈芝蘭堂新元会図〉中ロシア文字 (1794年・寛政6)
11. 杉本龍造氏所蔵遺墨〈福寿〉 (1812年・文化9)
12. 寺崎遜旧蔵遺墨〈福寿〉 (1812年・文化9)
13. 鷹見本雄氏所蔵遺墨〈イロハと洋数字〉 (1813年・文化10)
14. 同上遺墨2種〈南山寿〉〈鶴〉 (1813年・文化10)
15. 鈴鹿市教育委員会所蔵遺墨〈鶴〉 (1814年・文化11年)
16. 個人所蔵遺墨〈洋数字〉 (1816年・文化13)
17. 鈴鹿市教育委員会所蔵遺墨〈鶴, 亀〉 (1817年・文化14)
18. 個人所蔵遺墨〈福寿〉 (1817年・文化14)
19. 早稲田大学図書館所蔵遺墨透写 (1818年・文政1)
20. 亀井高孝旧蔵遺墨〈ロシア文字によるイロハと洋数字〉 (1819年・文政2)
21. 鈴鹿 山口俊彦氏所蔵遺墨〈鶴〉 (1819年・文政2)
22. 鈴鹿 深田神社・樋口房磨氏所蔵遺墨〈平仮名文字〉 (1819年・文政2)
23. 鈴鹿 伊藤公毅氏所蔵遺墨〈ロシア文字によるイロハと洋数字〉 (1822年・文政5)
24. 早稲田大学図書館所蔵遺墨〈南山寿〉 (1824年・文政7)
25. 個人所蔵遺墨〈南山寿〉 (1824年・文政7)
26. 鈴鹿 本田昭七郎氏所蔵遺墨〈鶴〉 (1825年・文化8)
27. 市立函館図書館所蔵遺墨〈魯西亜中興国王…〉 (1827年・文政10)
28. 鈴鹿 丸井将熙氏所蔵遺墨〈ロシア文字によるイロハと洋数字〉
29. 鈴鹿 小池光雄氏所蔵遺墨〈福寿〉
30. 鈴鹿 内山晋氏所蔵遺墨〈イロハニホヘト〉
31. 同上〈ヤマケフコエテ〉
32. 同上〈イロハニホヘト〉

33. 伊坂家旧蔵遺墨〈ヨタレソツネナ〉
34. 個人所蔵遺墨〈李白一斗詩百篇〉
35. 鈴鹿 河野辰雄氏所蔵遺墨〈名月やたたみのうへに松のかげ〉
36. 早稲田大学図書所蔵遺墨〈行く末は誰が肌触れむ紅の花〉
37. 同上〈亀，長寿の嘉瑞なる〉
38. 同上〈графъ [伯爵]〉

3 各資料の記述

上記資料につき書誌的な事項および本稿にかかわる点についてのみ各個記述する。以下，上記の資料の番号をもってその資料名にかえる。さらに未見の場合は，はじめにこれをことわり，拠るべき写真等があればそれに依拠するが，未見の資料についてはなるべく他資料の援用としてのみ用いることに制限したい。

1.——写真1参照。大きさ縦 65.5 cm 横 126.5 cm 前後^{註2}。うす草色の洋紙6枚を貼りあわせて1紙とし，うすい橙色の枠内に日本図を描く。国別に境界を有し城下町には黒印を捺して朱色に塗る。漢字・仮名まじりにて国名・地名を記す。時に短文がある。これらは墨書き。ついでその下，ないし脇にロシア文字による表記あるいはロシア文がペンで書かれる。図の右裏端には次のような2行にわたる光太夫の自署があり，手は毛筆である。（原文縦書き。数字等原文のまま。以下同じ）。

天明九酉歳七月廿八日

大日本_{ニ面}伊勢国白子大黒屋光太夫 図⑩

2行とも書体は楷書とも行書ともいえるが，光太夫独得の字であり，〈白子〉〈黒〉に著しい。数字〈廿〉は，資料2にある署名中の日付〈廿七〉と同じくずし方である。2印とも黒印で，方印は一辺9mmで〈知〉の1字，丸印は径16mm〈忠和〉の2字を刻む。なお天明2年7月はすでに寛政と改元

されその元年 (1789) であるが、光太夫はもとよりこのことを知らない。この資料中本稿にかかわるものは上記自署および墨による日本の地名・短文等である。ロシア文字による筆跡は光太夫のものではない。

2.——写真 7-12 参照。Cod. Ms. hist. litt. 48^w。縦 19.7 cm 横 11.1 cm, 厚さ 2.5 cm 前後の横長のノートである^{註3}。この中に光太夫書蹟 (54 v), 光太夫立ち姿 (80 v), キリル・ラクスマン絵・書蹟 (42 r-42 v) キリルの長男エフスタフィイ・ラクスマンの書蹟 (65 r) が含まれる。むろん本稿の対象は第 1 のものである。54 v に次のように光太夫の自署がある。

天明拾歳

伍月廿七日

日本伊勢ヶニ

白子

大黒屋

幸太輔

㊦ ㊦

2 印は資料 1 に同じ。他は毛筆により、文字は容易に読めるが、光太夫一流の俗字が連続する。〈明〉は偏が目のように、旁は 4 画目を垂直に引く。〈拾〉の偏は木。〈月〉も〈明〉の旁と同じ形。〈廿〉は〈本〉の略字のようにみえ、〈日〉は〈且〉とある。〈日本〉の〈日〉は〈目〉となり〈本〉は〈大〉に〈十〉の俗字。〈白〉はまん中の横棒を垂直に書く。〈黒〉は〈由〉と〈二〉と〈、、、〉を重ねたような形。〈幸太輔〉は〈幸〉と〈輔〉の用字に注意せよ。上にのべた〈日本〉〈白子〉〈大黒屋〉の字様は光太夫の他の資料に頻出する。なお各文字脇にラテン文字 (鉛筆書き) があるがこれは光太夫のものではない。

3.——写真 2 参照。大きさ縦 64.5 cm 横 137 cm 前後^{註4}。上質の白色洋紙 2 枚を貼りあわせて 1 紙とし、朱色の枠内に日本図が描かれる。資料 1 と同図とみてよい。左枠余白に光太夫の自署が全 4 行で、内容上上方 2 行下方

2行にわかれ、墨で書かれてある。第1～3行が草書的であるが、第4行は楷書に近い。

天明十一年 日本伊勢国白子

三月下旬 大黒屋幸大夫筆 ㊦㊧

2印ともに資料1に同じ。〈幸大夫〉の〈幸〉〈大〉^{註5}に注意。また〈黒〉は資料2に同じ書き様。この自署脇に達者なペン書きで、かつロシア文字の筆記体でロシア語訳が書かれている。また図内に草書漢字・仮名まじりの地名、あるいは短文がある。ただし地名等の表記がしばしば資料1とことなることに注意。日本語の脇あるいは下にロシア文字の表記が添えられる。これらロシア文字によるものはすべて光太夫によるものではなく別人の手であり、対象外とする。ただし、図の左端裏上端に2行のペン書き〈小ヅケ国/伊わミの国〉の書き込みがあり、これは光太夫の手とおもわれる。なお日本語地名はおおむね毛筆によるが、ごく少数ペンで書かれることもある。

4.——写真3参照。大きさは縦66cm横124cm前後^{註4}。白色の上質洋紙2枚を貼りあわせて1紙とする。資料3と同じ日本図を描く。右端裏に次のような毛筆による光太夫の2行にわたる自署がある。

天明拾壹歳参月吉日

大日本伊勢白子大黒屋光大夫筆 ㊦㊧

末の〈筆〉の字は草体だが、他は楷書に近い。〈白〉〈黒〉は資料1・2に同じ。2印は資料1に同じ。〈光大夫〉の〈大〉に注意。2印の下に朱筆で〈1791 Года〉とある。この朱の書き込みは資料7表紙に残る朱筆3行のうちの第1行〈1791 Года〉に酷似する。数字〈7〉を2筆で書く書き方が同じである。光太夫の手か。この図では日本語表記による地名あるいは短文のみが書かれてあって、ロシア文字表記を有さない。しかも日本語表記において、資料3とは種々において異なっており、片仮名・平仮名表記とくに前者がめだつ。全体としてこの図は資料2と図柄などが同じといってよいが、上記の点がこの図の一大特徴である。いずれにせよロシア文字は書かれてい

ず、日本語はすべて光太夫の手とみなされる。

5.——写真4・5参照。手紙本体は大きさ縦32.8 cm 横41.8 cm。上下2段表裏に墨書されている。文末に自署、日付け、あて先が次のようにある。

大黒屋光大夫

㊦㊦

亥ノ六月吉日

大日本

武蔵国江戸本船町

白子屋清右エ門様

仁兵衛様

参々御中

〈大黒屋光大夫〉の〈大〉に注意。全体としては資料8に見える〈大黒屋光太夫〉の文字の形に似る。日付けの〈吉日〉の〈日〉は資料2にある〈且〉と同じ。〈大日本〉の〈日〉は〈目〉，〈本〉は〈大〉に〈十〉の俗字。〈江戸〉の〈江〉は〈ろ〉のようにある。〈白子〉は資料2に同じ形。書簡本文はつとに名高く名文といえ、さらに光太夫の日本語での書きぐせとくに漢字のそれを知る上でまとめた資料であるが、ここでは2つのことばつきだけを指摘するにとどめる^{註6}。〈やのをふき〉と、〈屋根〉を〈やの〉とする。方言形としても確認できない。用字法として、〈何にたとゑ用も無御坐候〉と〈様〉を音が通じる〈用〉字を用いている点である。おそらくかかる用字法は当時一般にあったと思われるが、光太夫においてはとくに日立つので、注意をうながしておく。さて、本文末にはいくつかのロシア文字がみられ、さらに上包みにはロシア文字とさらにラテン文字がみられる。だれの手であるかにわかに速断しがたい。上包みの書蹟についてはほとんど紹介されていないので書簡末ともども次に引用する。まず書簡末の手紙本文と署名〈大黒屋光大夫〉との間に①〈даиккоуя」Кодаю〉の署名がある。次に月日と宛先との間に②〈Нипонъ Мусасъ」Еидо Хонфунацо」Сирокая Сёю」мунъ

Сама」 Нихи Сама〉とある。月日の上に③〈Cod. Asch. 150〉とあるが、これはゲッチンゲン図書館の書き込み。上包みは本体と同質のロシア製洋紙を用い（watermark をもつ⁷⁾、三つ折にして日本風に上下を折る。表の上1/3に4行にわたりロシア文字で④〈Нѣпонъ Мусасъ」 Еидо Хонфунацо」 Сѣрокоя Сѣ иомунъ」 Сама Нихи Сама〉とある。次に中央にラテン文字6行でこうある：⑤〈Nipon Musas」 Eido Chonfunazo」 Shirokoja Sē Jomun」 Sama Nichi Sāma」 Daikokúja」 Kodāju.〉。その下にロシア文字で署名がある：⑥〈даикокуя Кодаяю〉。さらにその下に次のドイツ語の書き込みがある：⑦〈von dem Japaneser geschrieben」 in St. Petersburg 1791.〉また上の折り返しにもドイツ語で次のような書き込みがある：⑧〈Erhalten d. 9. Aug. 1793.〉。

さて、手の別からみてゆく。⑧は〈1793年8月9日入手〉⁸⁾の意だが、ゲッチンゲン大学図書館の Dr. Helmut Rohlfing によると Asch 151 の浄瑠璃本（＝資料7）中にはさみこまれた説明書きと同一人物の手という。筆者も実物を比較してこれに賛成したが、この人物は Asch と同時代人で、Asch の蒐集品を整理した司書（かつ教授）であつたらしい⁹⁾。④は宛名で〈日本 武蔵」江戸 本船町」白子屋清右エ門 様」仁兵衛 様〉をロシア文字で綴ったものであるが、②と同筆である。ただし、〈白子屋〉の〈コ〉を②は〈ка〉と、④は正しく〈ко〉と綴る。〈シ〉は④がアクセント符をもつ。さらに〈清右エ門〉の〈セイ〉を②は〈Сѣи-〉と続けるが、④は〈Сѣи-〉とわけて綴る。〈仁兵衛〉はアクセントをつけてともに〈Нихи〉と綴るが、このまま発音すれば〈ニヒー〉である。いずれにせよ日本人らしくない。名前の⑥は①と同筆である。ただし、〈大黒屋〉の綴りに異なりはないが、〈光太夫〉の〈ユウ〉を⑥はアクセント符をつけて〈ю〉と綴り、①はこれがない。ゆえにこのままよめば⑥は〈コダユー〉、①は〈コダユ〉となる。問題は太文字〈К〉の髭が次の〈о〉の上にかかっている、少なくとも①ではもしかするとアクセント符を兼ねている可能性がなくもない。この①と②

と④と⑥はインクの色が同色で、ややうすい。これに対し、包紙のラテン文字⑤と⑦はインクの色がこくかつ文字の形がかっちりしている。おそらく⑤と⑦は同筆である。ただしこれらは③とは異筆で、③とこれらはインクの色もことになっているし線が細い。⑤は上のロシア文字④と下の同じく⑥の一字一字正確なラテン文字によるドイツ的な翻字である。ただしアクセント符等はロシア文字綴りに従っていない。〈Daïkokûja〉の〈u〉は一度〈y〉と書いて下への出っばりを消し、〈u〉となぞる。この人物はロシア語を解した人物と思われる。ロシア文字〈y〉はラテン文字の〈u〉であるから。⑦は〈1791年サンクト・ペテルブルクで日本人によって書かれた〉の意ととれるが、この手の第1候補者は Asch と思われ、したがって⑤も Asch の手の可能性が強い。さて問題は②・④と①・⑥が同筆か否かという点である。②・④の宛名は〈ムサシ〉を〈Мусасъ [ムサス]〉、〈エド〉を〈Еидо [エイド]〉、〈セイエモン〉を〈Сейомунъ [セイオムン]〉のように綴るから、おそらく光太夫の発音をかく聞きとったロシア人によるものと考えられる。〈ニヒイ〉は〈Нихи [ニヒー]〉のように綴られ、これは光太夫の狭い〈エ〉音を〈и〉と聞き、よって〈ニヒイ〉のように聞いた結果ととれる。上述のように①と⑥は同筆だが、⑥は〈-iû〉と綴り、このような光太夫の自署の例をしないが、しかし①は手紙本文の漢字署名脇に書かれていることから自筆の可能性がたかいというべきだが、どうも筆者には光太夫の手ではないように思えてしかたがない。ただインクの色が一致していることから①②④⑥は同一時に書かれたとみられる。言語的特徴から②④をロシア人の手とみて、①⑥はこれとは別筆で、①⑥は光太夫の手とみるのが自然であろうが、上述のような理由で、光太夫の手であるとの判断はしばらくあずけておくことにする。

6.——未見。亀井高孝『光太夫の悲恋』に考察がある。このうち『絵本写宝袋』『源平曦軍配』『森鏡』の書き込み部分のいくつかが写真で掲げられているから、目で確認できるもののみ言及したい。とくに『森鏡』裏表紙およ

び『絵本写宝袋』上欄書込み^{註10}はすべてロシア文字でいわばローマ字綴りにした日本語であり、筆者の考察には貴重な資料である。いくつか筆者の立場から指摘しておかなければならない。1)〈Японцу даикокую Кóдаю〉あるいは名前のみがしばしば書込まれてある。〈Японцу〉はロシア語としては〈японец [日本人]〉の単数・与格ゆえに〈日本人に〉の意だが、おそらくここでは単に〈日本人〉の意味であろう。したがって〈日本人 大黒屋光太夫〉と書いたことになる。ロシア文字は筆記体だがわかりやすい筆記体で、続け書きではなく一字一字わかれて書いてある。〈光太夫〉の〈光〉を〈Kó-〉とアクセントを附して綴ることに注意せよ。(この点については後述する)。滞魯中の光太夫の自署はほとんどすべて〈Kóдаю〉とアクセントをつけて綴られている。cf. 7, 8。なお語中の〈к〉は18C風の〈п〉で書く。

2)『森鏡』見返しにロシア語の書き込みがあるが判読できない。cf. 8。3)『絵本写宝袋』上欄と『森鏡』裏表紙の書き込みにおいて、18C風の字体〈ε・m・N・п・п〉がひんばんに用いられる。これらは〈ε・т・Н・к・в〉の異体である。4)同上で、日本語のロシア文字綴りで次の諸点が認められる：①格助詞〈へ〉は〈ε〉と表記。文字として〈э〉は見えず。②〈チ〉は〈ци〉と綴る。〈чи〉はない。③〈ズ〉を〈зу/жу〉と2様に綴る。④〈セ〉は〈се〉と綴る。〈ше〉はない。⑤〈ゼ〉は〈же〉と綴る。〈зе〉はない。⑥〈ジャ〉は〈жя/зя〉の2様に綴る。⑦〈シ〉は〈си/ши/ші〉と綴るが、しばしば母音を脱落させ、その場合は〈ш〉とのみ綴る。⑧ラ行音中、〈ラ〉は〈ра/ла〉、〈リ〉は〈ри〉、〈ル〉は〈ру〉、〈レ〉は〈ре/ле〉、〈ロ〉は〈ро/ло〉と綴る。すなわち〈リ・ル〉を除き他にはすべて〈л〉を用いた表記をもつのが特徴的である。⑨〈フ〉は〈ху〉と綴る。〈фу〉はない。⑩〈ヲ〉を〈во〉と綴る。⑪〈ヨ〉は〈ю〉と綴る。⑫撥音は語末で〈нь〉、語中でも〈нь〉と書くことが多く、語中で〈н〉とも綴る。⑬促音は無表記かあるいは〈д〉で表記する。この表記は日本語で促音を小書きに〈ッ〉で表わすことと関連があろう。⑭長音はこれを無視して短音として表記するのがふつ

うである。ただし自分の名〈Кóдаю〉のみは、アクセント符を付して長音であることを表示するが、これはむしろ例外といえる（後述。cf. 上項1)）。⑤二重母音的 [ii][ui] の第2音を〈й〉を用いて綴ることがあるが、これは少数。

7.—ゲッチンゲン大学図書館蔵。写真6参照。『花系図都鑑』に書き込みがある。この本は1冊のみで、おそらく6の浄瑠璃本と1セットとなっていたものが単独に流出したものであろう。紺表紙4針眼で、大きさ縦22.3 cm 横15.9 cm 位でいわゆる半紙本^{注11}。三都板で〈宝暦拾二年」壬年三月廿一日〉と末にある。表紙裏全体に毛筆で仮名・漢字草体の乱雑な書き込みがある^{注12}。cf. 6.『森鏡』見返し。〈白・百〉の中央の横棒を縦にかく光太夫のくせがでているから、おそらく光太夫の書き込みと認めてよい。さらに、背に墨で〈セイシエ 若姦亀屋四〉とある。(cf.『光太夫の悲恋』35ページ。) こちらは光太夫の手か否か筆者には判定できなかった。以上の日本語書き込みより興味ぶかいのはロシア文字による次のような書き込みである。表紙に、綴じ糸を下とみたてれば、3行で次のように朱筆によるロシア文字が大きく書かれてある。〈1791 Года」 Японцу даикокую」 Нипонъ Кóдаю〉。全体としては〈1791年に。日本人 大黒屋、日本 光太夫〉の意である。(〈японцу〉については6の1)を見よ)。全体がわかりやすい筆記体で書かれるが、数字〈7〉は2筆で書かれ4の朱筆〈1791 Года〉の場合とよく似ている。〈к〉は〈п〉, 〈Н〉は〈N〉と書かれる。また〈Кóдаю〉とアクセントを付して綴ることにも注意。これらは光太夫の手と認められる。ついで以下すべて鉛筆書きで〈[?] а таньжаку」 кикоскелеба〉(3才上欄), 〈Тимофей Осиповичъ〉(5才上欄), 〈Кононъ даниловичъ〉(36才上欄), 〈дария/дария Андреѣвна〉(58ウ上欄) とある。これらはわりあい達筆だが読みやすく〈m・n・ε〉等の18C風ヴァリエーションが用いられる。第1の頭の部分は分らないが以下は〈タンザク」キコエケレバ〉と読める。書き込みのすぐ下に〈短冊〉の文字が見えるからこの語か。後半は〈聞えければ〉

かとも思うが対応の文字は近くに見あたらない。ここでは〈ン〉に〈нь〉を、〈ザ〉に〈жа〉を、〈レ〉に〈ле〉を用いていることに注意せよ (cf. 6. の2), 4)⑧・⑫)。また〈я〉の古い筆記体も見られる (cf. 35)。これら鉛筆書きの手は光太夫であろう。

8.——光太夫将来本のひとつ^{注13}。写真14-17参照。原名〈Руководство къ арифметикѣ для употребленія въ народныхъ училищахъ Россійской имперіи. ч. 1. Въ Санктпетербургѣ, 1784 года.〉大きさ縦 16.3 cm 横 10.2 cm 前後。いわゆる 8°版。この本の表紙、表紙裏、遊び紙裏、裏表紙裏の4個所に光太夫の書き込みがみられる。さらに遊び紙表にも3行ほどの書き込みがあったと思われるが、一部痕跡をのこすのみで、消去されている。この本はおそらく原装で、背が茶色の皮であり、表紙・裏表紙のそれぞれ端迄おおっている。表紙のこの部分の真中からやや下よりに〈даи Ко〉とある。〈д〉は筆記体小文字。〈アイ〉の第2音を〈и〉と綴ること、さらに〈コー〉を〈Ко〉と1音で綴ることに注意せよ (cf. 6. ⑭)。またこのロシア文字の右下方に〈七〉と書いたちぎれた和紙小片がはってあるが、もとより誰の手か不明。ここでは除外する。第2に表紙裏だが、のどの部分に太くしっかりと次のようにある：〈大日本伊勢国白子大黒屋光太夫〉。〈伊・国・黒〉等の文字が特徴的で、光太夫の典型的な署名といえる。筆によるものだろう。さらに、その脇、紙の下の方に2段で〈даикокуя」 Kódau〉とロシア文字による署名がある。ペン書きで、読みやすく上手というべき。初めの〈д〉は筆記体の小文字。〈к〉は〈п〉の字体。〈Kó-〉とアクセントを付して綴る。この署名は光太夫の自筆と思われる。さらに次の3種の書き込みが存在する。表紙をのどを下にしてみた場合、上端右よりに〈Милостевой Государь мо[...〕〉とあり句末は虫食いでみえないが、〈-ему〉があったであろう。これはロシア語で〈陛下〉ないし〈貴殿〉の意のよびかけ。〈п〉の字体がみられる。そのロシア語の右下に3列7段にわたりロシア文字によるイロハが書かれる。1列から3列への順で引用すると、〈i po xa n[i] ho

хе то」ці рі ну ру о ва ка」іо та ре со цу не на〉とあり、第1段には虫食いがあるが、他との関係から〔 〕内の文字が推定される。〈m・n〉の文字、さらに〈ヨ〉は〈io〉とあり、これはあるいは〈iō〉のつもりかもしれない。第3にロシア語の下、紙中央部に〈бео・」びやう〉とある。cf. 裏表紙裏書き込み。ロシア文字による署名以下ここ迄すべてペン書きで認められる。さらに本をもとの状態にもどすと、ちょうどロシア文字によるイロハの第2段に重なって、うっすらとエンピツによるロシア文字の書き入れがみえる。〈мунино́ю〉のように筆記体で書かれるが、意味不明である。鉛筆による。(cf. ゲッチンゲン浄瑠璃本書き入れ)。第3に遊び紙だが、中央にうすい朱で〈No 457.〉とあるが、これはおそらく別筆で除外してよい。のどにペン書き2行でかつ草書で〈勢州白子若衾」亀屋兵藏〉とある。〈州・白・兵〉が異体字もしくは書き方において特徴的。その左上方、紙の上方にペン書きで〈Камея хіюозо〉の名が見える。のどの部分の名前のロシア文字による表記だが、〈ヒョウ〉を〈хіюо-〉と2母音で長音を表示しながら、一方〈ゾウ〉の方は〈-зо〉と短母音で長さを無視している。第4の裏表紙裏は雑多な書き込みで、すべてペン書きであるが、大まかに3種に分けられる。その1はロシア語、2は日本語をともなったそのロシア文字による表記、3は洋数字である。本をのどを下にみたてると、上方に、3行ほぼ同一のロシア語がみられる。第1行は〈Милостевой Государь Моему〉。第2行は〈Государь〉の部分の書体をいく分かえて同文〈Милостевой Государь Моему〉。第3行は〈Милостевой Государь〉のみ。cf. 表紙裏書き込み。第2グループとして、第2行ロシア語の左に〈бео.」ビヤウ〉と、第3行ロシア語の右に〈Мма 馬／百 хяку〉の2語。次の行、すなわちロシア語第3行の下に、〈源」гень／кю 久／丞」дзію／хію」兵／十 дзу〉その脇たてに〈іо／иа／Іо〉とある。次の行は〈長」тчо／шо」庄〉とあり、次に〈10 100 1000 1000 100000〉の洋数字があり、〈10〉の右上に〈доу〉、〈1000〉の上に〈хяку〉とある。洋数字の後に〈拾」дзу〉その左下に〈五 го〉、次に〈мю」

明〉、〈10 ヨ〉の語がある。さいごにのどの所に〈10. 100. 1000. 10000. 100000〉と洋数字があり、〈10〉の下に〈十〉、〈100〉の下に〈百〉、〈1000〉の下と上に〈千〉と計2字、〈10000〉の上に〈壹万〉、〈100000〉に〈百万〉とある。ここで光太夫は擁音と長音の表記法に頭をひねっている様子がうかがえる。なお上の3行のロシア語だが、〈моему〉は与格ゆえ、その前の主格形〈Милостевой Государь〉とは文法上あわない。表紙および遊び紙裏の名前の表記において、長音の表記が2分しており、上記もふくめて、この時期にはかなの表記法がやや不安定であることを、この資料は語っている。

9. 本資料は『北槎聞略』に附されている地図の1枚であり、すべて文字はロシア文字によって書かれているが、すくなくともこのうち地名および短文の書き手は光太夫と筆者は考える。この前提にたって以下の記述をすすめる。写真13参照。本資料の大きさは縦48.6 cm 横73.2 cm。資料自体の問題は別稿にゆずるが¹⁴、この地図は写しであり、したがってもとの図に文字の形・表記等は依存するであろうから、どれほど光太夫の自由意志が加わっているか、彼の手らしさがわかるかはやや疑問である。ここでは次の2点を指摘する。①地名の表記において18世紀風の草書筆記体が散見し、これらが割合きちんとかかっている。文字の素養を有する者の手と思われ、単なる模写とは考えられない。これに反し、②ロシア語の短文中、文を途中で切ったり、綴りが誤っていたりする個所がみられる。この短文自体がやや古風な文語であること、したがって模写時に書き手の理解をこえていた可能性をもち、このことが原因ではないか。①②につき、光太夫の手であってもそれらの事柄とは矛盾しない。たとえば次のような光太夫自身の言も考えに入れておかなければならない。加藤曳尾庵『我衣』巻四¹⁵に次のようにある。

○幸太夫、横文字読候義も書候事も、鍛錬の趣に候へ共、彼国の横文字は、文字は覚へ候得共、読み方違い候得ば、不読よし申候。

さらに伴信友による光太夫の談話筆記¹⁶にこうある。信友が問い光太夫が

答える。

○問 本朝にて平生の談話の詞手翰俗用の文章また書籍に記す文にも其体異なるがあり 彼国はいかに 光答て云 彼国も専同し事也 故に某彼国の平常の談話の詞又物ノ名などはあらまし覚えたるがことくなれとも書籍はよみとく可能はす 平話のことく書きたるものはおほかた推量して意を得る事もあり

この率直なことばは、彼の死の3年前であり、光太夫75才のことであった^{注17}。

10. 市川岳山画、諸家賛の本図は大きさ縦 140 cm 横 127 cm。図中に光太夫の書蹟が模写されている。鶯ペンを手にして今文字を書きおえたように光太夫が描かれ、左手でもつ紙には〈Енуварь.」 Даы. коо.〉とある。書体をよく似せて書いていると思われ、第1行の〈в〉は18C風のヴァリエーション〈и〉が使われ、署名の第1字は活字体の大文字である。このロシア語の単語は〈январь〉の意すなわち〈1月〉の意で、〈新元会〉にちなんで書いたと思われるが、その綴りについてはやや問題がある。村山七郎は、結論的にいえば〈古いロシア語〉の〈Генварь〉ないし〈教会スラブ語〉の〈genuarъ〉の当時の実際的な発音としている^{注18}。あるいは亀井高孝は光太夫自筆の唯一のロシア単語として珍重しながらも、綴り字を誤りとしている^{注19}。しかし筆者は次のように考える。1806-22年刊のロシア・アカデミー辞典^{注20}には〈Генварьあるいは Январь〉また別形〈ІАннуарій〉をもち、これはラテン語形だという。1847年の教会スラブ語・ロシア語辞典^{注21}も同様である。Dal' (1912年)^{注22}ではほぼ同じだが、〈януарій/іануарій〉の綴りをのせる。いずれも、ラテン語形からの別形が古くあったことを伝えているわけで、光太夫の示す〈Енуварь〉は語中に〈у〉の要素が含まれていて、この音はかなり明確に耳に達している筈であるから無視するわけにはいかない。よって、〈-у-〉を含まぬ〈генварь〉を書いたのではなく、〈яннуарій〉あるいは〈януарій〉(ia=я)の方を書いたものであろう。(もっ

とも Vasmer^{註23} は〈генуарь, генуарии〉の形もかかげるからこの形の別形とも考えられるが)。語頭の〈Е〉は、〈я〉が無アクセントの場合〈е〉に似る音であることから、〈я〉を〈е〉と光太夫が綴った、さらに語中の〈в〉は、〈у〉と〈а〉のわたり音を聞きとって、光太夫がこう綴ったのではないだろうか。むろん、〈генварь〉〈январь〉の綴り中の〈в〉にも影響されているかもしれないし、さらに〈-рь〉の語尾もこれらの綴りとの混同などがあると考えられよう。要は、光太夫がきいたのはラテン語形に近い方の発音であったろうということである。なお本書蹟は、光太夫自筆の唯一のロシア単語と亀井高孝は指摘したが、後述するように他に1例〈графъ〉の文字が早稲田大学図書館に残っている（下に述べる38.）。だが、光太夫がロシア語の単語をロシア文字で残していることは、やはり依然として珍しいことであるのにかわりはないであろう。

11.——未見。写真18参照。『あけぼの』によれば、大きさ縦29.0 cm 横46.5 cm。中央に大きくロシア文字で〈Фукжію. [福寿]〉、その下に小さく〈Дав. коо. [大光]〉。右端に〈文化九申歳五月吉日 大光書 六十式歳〉とある。〈福〉を〈Фук-〉と綴ることに注意せよ。cf. 12. 〈Фуку-〉。普通の発音の際〈フク〉の〈ク〉の母音は脱落しやすく、〈Фук-〉の綴り字はこれを反映したものであろう。

12.——未見。『好古類纂』第十一集^{註24}に次の一文とともに2ページ分折り込みの複製をのせる。写真19参照。原寸の記載はない。

○幸_(ママ)大夫書する所の欧字

寺崎遜

幸大夫は天明年間漂流して露西亞国に至り寛政四年に帰朝せし者なるが露国滞在中に其言語に通し其文字を学び帰りて後乞者あれば書して之を与へけるよし則ち余が家其一通を蔵せり而して幸大夫の子亀次郎は資性書を嗜み博く群籍に渉る号して梅陰先生という此幸大夫の書後また梅陰の手記を附せり今其文を写して此に出す因に江東長命寺境内息軒安井先生撰する所の梅陰先生大黒君碑銘ありこれもまた一通を写して後に附し

以て幸大夫父子の奇行を拓むるの料と為す

複製によれば、書は中央にロシア文字で大きく〈Фукужию. [福寿]〉とあり、その下に〈ふく寿〉と日本語を付す。cf. 11. 〈Фук-жию〉。さらに下に1行をなして左にロシア文字で小さく〈даы. коо.〉右に〈Дав. коо.〉とあり、すぐその下にそれぞれ〈大光〉〈大光〉と日本語を付す。左端には〈文化九申歳六月吉日 大光書 六十式歳〉とあり、さらに右端に〈福寿 四枚の内 大光〉とある。この書は、①ロシア文字の下に対応する日本文字が添えられる、②〈大光〉のロシア文字が2度くりかえされる、③左端に説明書きのような一文がある、の特徴を有する。②については、一方の頭文字を小文字筆記体、他方のそれを大文字筆記体で書き、書体の変化をみせつけようとしているともとられる（この点については後述する）が、しかし2度も名を書くのはやはり特異である。③につき〈福寿〉はまさにこの字の右に位置するロシア文字の漢字表記にちがいない。次の〈四枚の内〉は、光太夫が某か某々かに4枚1セットとしてこのような書を書き与えた、そしてこの書はそのうちの1枚であるということだろうか。他に類を見ず、その意味は正確には分らない。

この書の全体の文字は、その書きぐせ等から見て、光太夫の手と思われるが、複製ののちに梅陰による次の一文があって、この書を真筆とみている。梅陰の文章は、光太夫につき語るものがほとんどないことから貴重であるゆえ、やや長いが次に全文を引用しておく。引用文中闕字はそのままである。

此一幅者。我先考之所書也。先考諱幸大夫。^ヌ勢州若松邑人。家世農夫。出嗣叔父之家。以船梢為業。家号大黒屋。船名神昌丸。天明二年，壬寅十二月十三日。開帆白子。達江戸。路經遠州海。疾風暴至。梢断舵折。漂流八月。明年，癸卯，七月。達北亞墨利加之屬島，亞弼止伊杜加。以此島。又隸俄羅斯国。其国人常来漁海狸。即託其人。居四年。遂与達其国。又居九年。或為食客。或為官奴。險阻艱難備嘗之。慕国之情日益切。固請其国官。還本国。許之。遂官使及国人護送之。以達蝦夷褊

模魯。実我寛政四年，壬子，九月三日也。初発白子時。乗者十七人。而終於海上者一人。終於彼国及島者十一人留於彼国者二人。而得護送者財三人。曰先考。曰磯吉。曰小市。翌年，癸巳，五月七日。与彼国人開帆禰模魯。六月廿日。達於松前。而寓於侯客舎。先是侯告事於江戸。故

官使憲官村上石川兩君。来松前而幹事。七月十六日。從兩君。発松前。八月十七日。達江戸。寓雉橋門外之官邸。九月十八日。忝蒙上臨觀于吹上苑中。故執政白川源公。侍医桂川君等。侍簾前。以問彼国事。而具以其所見聞対之。六年，甲寅，六月。賜居于番街官園中。及月棒。文化九年。壬申，二月廿一日。請官薙髮。而不許更名。文政十一年，戊子，四月十五，死。行年七十八。葬于本郷元街。興安寺。法諱曰道誓。先考在彼国也。到其国都。見于其王。諳其風俗。通其言語。学其文字。後歸而在官園中也。偶来有迄文字者。莫所拒而書与之。頃日。井上子孝。得此一幅于骨董舗。携来乞序一言。予少長于賈豎間。目不知一丁字。固辞不可。乃附一言以還之。于時嘉永二年，己酉，四月。亀次郎記。

以上から、おそらく寺崎遜の有していたこの書はかつて井上子孝^{注25}が骨董屋で入手したものである。彼はこれを梅陰に見せて一言を得、以来この書に添えて所有していたと思われ、寺崎はこの一言ともども光太夫書をその後所有していたのであろう。現在、この書も梅陰のこの添え書きも所在は不明である。

13.——写真22参照。大きさ縦 33.1 cm 横 45 cm 前後。6 行にわたり次のようにロシア文字でイロハと洋数字を記す。〈і ро ха ны хо хе то, чы ры_] ну ру о ва ка. іо та ре со_] цу не на. ра му у ы но о_] ку я ма ке фу ко е те. а_] са кы ю ме мы шы. е хы мо_] се жу кію. 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13.〉^{注26}次に右下に〈Давл. коо. [大光]〉。右端に〈癸酉冬 大光書六十三歳〉。イロハをいうロシア文字の書体はきわめて飾りが多く、さらに大文字か小文字かの判別にくるしむ場合が多いが、しかし総体としては18世紀風のロシア

書体 (写真21参照)^{注27} と光太夫自身の書き癖とさらに毛筆によるために独得の書体となったものである。この独得の書体は、ロシアにあってロシア語を記すときにはあらわれておらず、帰朝後、揮毫の折々に形をなしていった書き風とみられる。〈イ〉は〈i〉と表記されるのにイ段の表記では〈ы〉が用いられる点、同一文字のヴァリエーション〈e/ε〉が書き分けられている点に注意。

14.——写真23参照。大きさ縦 36.4 cm 横 90 cm 前後。もと縦 31.2 cm 横 43.2 cm 前後の 2 枚の書蹟に裏打ちをほどこし、かつ四周に補強紙をはりつけて 1 幅に仕立てたものである。左の 1 枚には、まず左上にロシア文字でやや小さく〈Наньжань=〉中央に大きく〈Жію.〉とある。〈南山寿〉である。大文字〈Н〉を〈N〉と書くことに注意。右下に〈Дав. коо.〉とあり、右端に〈癸酉冬 大光書 六十三歳〉とある。〈Дав.〉の〈д〉は筆記体の大文字。右の 1 枚では大きくロシア文字で〈ЦУРУ. [鶴]〉とある。下に〈ісе. даы. коо. [伊勢。大光]〉とあり、右端には〈癸酉冬 大光書 六十三歳〉とある。地名の〈ісе〉は他にも見えるが綴りが安定している。〈даы.〉の〈д〉は小文字の筆記体。これらのロシア文字による日本語表記は、前項13のイロハの表記によって読みとくことができる。なおこの14では、〈ン〉を〈нь〉で綴るが、光太夫にあってはいわゆる jers 〈ъ/ь〉の文字としての区別がどうやら曖昧であったようで、さらに当時の筆記体での書き分けがロシア人でもややいいかげんと見られることから、にわかに判断することはむづかしいが、文字の上からは光太夫は〈ン〉をここでは〈нь〉と綴ったとしておく。本来は〈нь〉と綴るべきところ。また〈山〉を〈жань〉と〈ジャン〉のように綴り、次の〈寿〉を〈Жію〉と綴って、ザ行とジャ行を同じように扱う。後者は本来〈Жю〉と 2 字で綴るべきだが、〈i〉音が添えられている。

15.——写真24参照。大きさ縦 31 cm 横 48 cm。ロシア文字は前項14の右の 1 枚と同じ。すなわち、〈ЦУРУ. [鶴]〉と大書し、その下に〈ісе. даы.

коо. [伊勢。大光]〉とある。〈даы.〉の〈д〉も同じく小文字筆記体。右端に〈文化十宅戌秋」勢州白子産」大黒屋光太夫書」六十四歳〉とある。〈白〉字が特徴的。

16.——未見。写真25参照。『あけぼの』によれば白扇子に書かれてあり、大きさは縦 31 cm 横全開 48 cm。扇面に孤状 2 行で〈1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12=」13 14 15 16 17 18 19 20 30.〉とあり、その右側に〈丙子夏 勢州産」大黒光太夫書」六十六翁〉とある。〈大黒〉とのみあること、〈翁〉とあることに注意。

17.——写真26参照。扇面で、大きさ縦 17.7 cm 横 48.5 cm。扇の上端に金筋を有し、扇面にはきららを含み、かつ油気がつよい。中央に〈цу-ру. ка-ме. [鶴。亀。]〉、下にやや小さく〈даы. коо. [大光]〉とある。その右に〈丑夏勢州産」光太夫書」六十七翁〉とある。〈даы.〉の〈д〉は筆記体〈ㇿ〉で珍しい。

18.——未見。以下『あけぼの』によるが、大きさ未詳。写真27参照。ロシア文字で〈Фу-ку-жю. [福寿]〉とあり、その下に〈ふく寿〉と日本語を付す。さらに下にロシア文字で上のそれとあまりかわらぬ大きさの文字で〈Даы. коо.〉とあり、その下に〈大光〉と日本語を添える。右端に〈福寿大光〉とあり、さらに左側に〈大黒光太夫書」六十七翁〉とある。さて、左端には草書による 2 か 3 文字かが記されている。この文字は難解で、専門家によれば〈光太夫〉のように読みうるとのことである。かかる草体による難解な文字は25にもみえるが、他にはあまりみられない。ひとつの読みとして述べておきたい。なおこの18はロシア文字も日本語も同じ太さの筆（普通のあるいはそれ以下か）で書かれたとみられ、したがって、料紙の大きさもさほど大きくはないのではなかろうか。

19.——桂川今泉文庫中の資料で、桂川家四代国端甫周の所有であった。薄紙に扇面の文字を透写したものである。薄紙の大きさは縦 27.4 cm 横 32.5 cm 前後。左右上端のきれた扇面の縁どりのなかに、2 行にわたって文

字がある。第1行はロシア文字で〈і ро ха ны хо хе то.〉第2行は〈1 2 3 4 5 6 7 8 9 10. 11〉。右下に〈Ды. коо.〉。右端に〈戊寅冬 勢州産大黒光太夫書 六十八翁〉。

20.——未見。亀井高孝『北槎聞略』の口絵の一つとして写真が掲載されている。大きさ未詳。写真は横長1枚で左右に内容上分かれる。左はロシア文字と洋数字のみが7行にわたってかかされている。すなわち写真で見えるかぎりでは、〈і ро ха ны хо хе то. чы ры. ну ру о ва ка. іу та ре со. цу не на. ра му у ы но о. ку. я ма ке фу ко е те. а. са кы ю ме мы шы. е хы мо. се жу кію. 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15.〉とロシア文字は草体が書かれる。右下に〈Ды. коо.〉の署名。本資料は13に酷似し、〈イロハ〜京〉の綴りは同一といってよく、たんに数字が2つ多く書かれるのみである。ただ署名は13が語頭を活字体大文字にちかい形であるのに対し、こちらは筆記体大文字で書かれる。つぎに右の写真だが、ロシア文字によるイロハが6行で書かれる。左の写真の文字と同じく草体だが、やや大きい。すなわち〈і ро ха ны хо хе то. чы ры. ну ру о ва ка. іу та ре со. цу не на. ра му у ы но о. ку. я ма кы[sic] фу ко е те. а. са кы ю ме мы шы. е хы мо. се жу кію.〉。右端に〈己卯春勢州白子産 大黒光太夫書 六十九翁〉とある。本資料2つと13は、〈イロハ〜京〉の文字の配分、すなわち行のかえ目等が同一であることに注意。

21.——写真28参照。大きさ縦36.0 cm 横50.8 cm 前後。軸装。大きくロシア文字で〈ЦУРУ. [鶴]〉とある。下に小さく〈ісе. Ды. коо. [伊勢. 大光]〉。右端に〈己卯秋 大黒光太夫書 六十九翁〉とある。本資料はロシア文字の部分が14の右側および15と同内容かつ同体裁であるが、署名中、〈大〉を本資料が大文字活字体で書くのに対し、他は小文字筆記体で書く点がことなる。なお本資料は亀井高孝により〈墨痕淋漓，雄渾なる筆致は，いまはやりのオブジェとか前衛書道のような技巧に走っていないだけに味わいが深い〉と評された。箱書きにはさらに〈ロシア文字 つる 昭和癸卯新春

亀井高孝」七十八翁〉とある。

22.——写真29参照。大きさ縦 24 cm 横 9 cm 前後。上から 8 cm のところで折ってあったらしく、その下の部分に 5 行仮名と漢字のみを有する。すなわち〈いろはにはへと右」ゑひもせす京迄」己卯秋」光太夫書」六十九翁〉。現在、大本の『漂流船実録』^{11:28}の末に糊づけされているが、おそらく20の右の書蹟のようなものに添え書きのごときものとして添付してあったのではないかと推量される。しかし光太夫の仮名書跡として貴重といえよう。

23.——未見。写真30参照。『あけぼの』によれば、大きさ縦 32.0 cm 横 46.5 cm。ロシア文字による〈イロハ～京〉と洋数字を 7 行に書く。すなわち〈ī ро ха ны хо хе то. чы ры=」 ну ру о ва ка. ѿ та ре со=」 цу не на. ра му у ы но о=」 ку. я ма ке фу ко е те. а=」 са кы ю ме мы шы е хы мо=」 се жу к ѿ.」 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11.〉。ロシア文字による署名はない。右端に〈壬午冬勢州若松産」大黒光太夫書」七十二翁〉とある。

24.——写真31参照。大きさ縦 33.4 cm 横 44.2 cm 前後。料紙よりも大きな紙に裏打ちされて仕立てなおされている。右端の文字が切れていることからもとは表装されていたものを切りはがしたものであろう。上方にロシア文字でやや小さく〈Наньжань= [南山]〉とあり、次に大きく〈Жію. [寿]〉とある。ロシア文字の署名なし。右端に 3 行あって第 1 行は右側が切れているが充分よめる。すなわち〈甲申春勢州白子産」光太夫書」七十四翁〉。cf. 14左。

25.——未見。写真32参照。『あけぼの』によれば大きさ縦 23.2 cm 横 33.5 cm。上にやや小さく〈Наньжань=〉とあり、すぐ下に〈なんざん〉と読みをそえ、中央に大きく〈Жію.〉と書く。その下に〈寿〉と読みをそえる。右端に全体の読みである〈南山寿〉とあり、ついでやや間をおいて〈甲申冬勢州白子産」大黒光太夫書」七十四翁〉とある (cf. 26)。さらに左端下に 3 か 4 文字の草書があるが、難読きわまりなく、専門家の意見によれ

ば〈大太夫奉〉ではないかとのことである^{註29}。ただやや問題があり、今後の課題としたい (cf. 18)。14左および24は同内容だが、本資料はロシア文字下に〈なんさん・寿〉と、さらに右端に〈南山寿〉と全体の読みを付する点がことなる。

26.——未見。写真33参照。『あけぼの』によれば大きさ縦22.8 cm 横34.0 cm。中央に大きく〈ЦУРЬ.〉とあり、下に〈つる〉と読みを付す。右端にその漢字表記〈鶴〉の一字がまず書かれ、つぎに〈乙酉夏勢州白子産大黒光太夫書七十五翁〉とある。ロシア文字に読みを付しさらに漢字表記を右端に示す形式において、本資料は25とよく似ている。

27.——写真34・35参照。軸装。大きさ21.2 cm×58 cm^{註30}。署名等を含めれば20行に漢字と片仮名のみが書かれている。すなわち關字をそのままにして、また右訓を下に移して引用すれば、〈魯西亜中興国王 伯多禄帝八十八齡賀伊西波尼^{イヌハニ} 亜国主花鳥画寿扇一握進^ア 猷ス 当女主 亜瓦德利納^{アガテリナ}。亜烈起瘦納六^{アレキセウナト} 十一齡賀復尊崇ス 以来城 樓二封寿ス 然而予 請帰国 則予 本邦送還スルヲ 惜ム 不得止奏達ス 不顧 女主赦ス 乞暇時樓上ニ 居座シ 予ヲ 召テカ 掌上ニ 女主自ッ 寿扇ヲ 載臚賜ス 予 稽首拝受ス 早 予 帰 本邦 公都被封雉子橋御廐 其後復番町御薬園守ニ 移ル予 七十七齡賀彼為寿 扇尊祝者也 九月九日 幸太夫誌 大国(花押)〉。〈大国〉の末には〈七十七〉が花押様に誌されている。この文字は言うまでもなく〈崑〉字をもかねていて、したがって自己の年令とともに〈崑寿〉の〈崑〉すなわち〈喜び〉もあわせて示すものであろう。本資料は光太夫の手のように筆者には思われる。そうであれば、文中より77才の筆、すなわち没前1年の手ということになる。文政10年(1827)9月9日、重陽の際、揮毫した。内容につき一言する。要点のみを記せば、ビョートル大帝が88才の祝いの折スペイン国王から花鳥をえがいた扇をもらった。今の女王エカテリーナ・アレクセーヴナも61才の祝いに際しこれをまた愛で、以来城内にかざってあった。光太夫は帰国の赦しを得た折、女王手づからの扇をはなむ

けとして受けとった。光太夫は帰朝し、幕府によりはじめ雉子橋の御廐に、ついで番町御薬園に居を定められた。光太夫も77才を賀してこの扇を愛でて祝った、ということか。ピョートルは1672年生れ1725年没ゆえ、88才までは生きなかった。エカテリーナの祝いについても伝聞であろうか。光太夫がエカテリーナ（1729-96）に謁見をゆるされたのは1791年（寛政3）だから女王は62才か。この扇については未詳であり、女王自ら下賜したのは『北槎聞略』によればかぎタバコ入れであった。前後に扇の記述は見あたらない。帰朝後の住いはこの通りである。77才の祝賀については知られておらず、むろん規模も性格も未詳である。あるいは家族内だけのことであったか。最近の資料によれば^{注31}、伴信友が光太夫に面会したのは文政8年（1825）11月10日であり、光太夫は75才と答えた。この祝いの2年前である。本資料中重要な点は上述の、①扇をはなむけとして受けとったこと、②77才の祝いをしたこと、さらに③として〈幸太夫〉の署名およびその後の〈大国〉さらに花押様の〈七十七〉の存在である。〈大国〉は音通および好字のゆえの用字で、すなわち〈大黒〉である。なお、光太夫は禿筆を使ったらしく、文字のはねやはらいにかすれやさき割れがみられる。自分の名前の〈幸〉字の書き方に注意せよ（写真参照）。同じく〈太〉の中央の点は、『算術入門書』中の署名の〈太〉と同じく、ぼつんと丸く打ってあるのに近い。本資料はいわば重陽の折の光太夫の喜寿自讃の辞である。

28.——写真36参照。腰屏風の貼りませ中の扇面。大きさ縦16.5 cm 横44.0 cm。上下とも墨色の端をもち、扇面は柿渋か油かでうす黄色を呈する。第1行に〈i-ro-xa-ny-xo-xe-to.〉とイからト迄イロハを、次の行に〈1-2-3-4-5-6-7-8-9-10.〉と洋数字を書く。数字は書き方の様が今日とことなることがよくわかる。左端に〈Дав. коо.〉の署名で頭文字は活字体大文字。

29.——未見。写真37参照。『あけぼの』によれば大きさ縦12.3 cm 横14.7 cm。紙中央にまとまるようにして、まず2段に〈Фук-] жио〉とある。

cf. 11 〈Фук-〉, 12〈Фуку-〉。ロシア文字の下に〈フ・ク」寿〉と読みを付す。丸は区切りを示す。ロシア文字左脇に漢字表記の〈福寿〉を示し、ロシア文字右下に、斜めに〈大光〉と署名がある。

30.——写真38参照。以下30～32の3点は同一人の所蔵。3点とも軸装。大きさ縦 27.8 cm 横 30.8 cm。ロシア文字のみで、はじめ2行にわたり〈i. po. xa. нй. =」 хо. хе. то.〉とイ〜トを書く。右下に〈Даы. коо.〉の署名があり、頭文字は大文字筆記体。この資料では〈二〉に〈нй〉とあてることに注意。他は多く〈二〉に〈ны〉をあてる。また〈и〉はあるいは〈й〉かもしれないが、他にほとんど例がなく速断しかねる。

31.——写真39参照。大きさ縦 27.8 cm 横 30.8 cm。ロシア文字のみで2段に〈я. ма. ке. фу. =」 ко. е. те.〉とヤ〜テを書く。右下に〈Даы. коо.〉。頭文字は活字体大文字の初筆にかざりをもつ。

32.——写真40参照。大きさ縦 53.2 cm 横 56.3 cm。二段にロシア文字で〈i. po. xa. нй. =」 хо. хе. то.〉とあり、左下に違い柵のように2段に〈Даы. коо.〉の署名。さらに左下端に〈イロ□ニホヘト〉と片仮名が細字で書き込まれている。この片仮名は光太夫ではなく別筆か。〈ハ〉の部分は虫喰いで読めない。〈ни [二]〉の表記に注意せよ。cf. 30 〈нй〉。

33.——未見。『河芸郡史』^{註33}の口絵にみえる。写真41参照。〈船頭光太夫遺筆 若松村伊坂秀五郎氏所蔵〉とある。大きさ未詳。写真によればロシア文字のみで2段に〈ю. та. ре. со. =」 чу. не. на.〉とヨ〜ナを書く。右下に〈даы. коо.〉と名があるが、頭文字は筆記体の小文字である。この書蹟は様式が30～32によくにている。

34.——写真42参照。縦 30.4 cm 横 39.5 cm。料紙はかなり劣化が進んでいたもようであり、裏打ちがしてある。ロシア文字のみで、まず大きく〈Ріхаку= [リハク]〉次段にやや小さく〈ідтоо= шхядпєнь. [イットオ シハッペン]〉とある。右下に違い柵風に〈Даы. коо.〉の署名で、頭文字は活字体大文字。出典は杜甫の「飲中八仙歌」の第6歌からで、〈李白一斗詩百篇〉にあ

たる。この資料では表記と方言の点が興味ぶかい^{註34}。まず、促音を〈д〉の
 いってんばりで表記する点。これはどうやら光太夫の創案のようで、6の
 『絵本写宝袋』欄外書き込みにはやくみえる。おそらく日本語の小書きの促
 音表記〈ッ〉に関係するであろう^{註35}。〈їдтоо [イトトオ=一斗]〉
 〈хядпенъ [ヒャッペン=百篇]〉。つぎに長音を同一母音文字の連続で綴っ
 ている：〈їдтоо〉。『絵本写宝袋』では短母音で示す場合と同一母音を重ね
 て綴る方法の萌芽的な場合とがみられるが、前者がまさっている。しかし在
 魯中の〈хїоозо [ヒョオゾ=兵蔵]〉の〈хїоо〉(資料8)、帰朝後の〈Ды.
 коо. [ダイコオ=大光]〉の〈коо〉(資料10)のその典型がみとめられる。
 この長音表記法もおそらく光太夫の創意であろう。第3に〈シ〉を〈ш〉と
 母音文字を脱落させて綴る。この例は『絵本宝袋』にしばしば出てくる。第
 4に〈ン〉を〈нъ〉と綴る。『絵本宝袋』では〈нъ〉と綴ることが多く、後
 者のこの綴り方はロシア語的であるが、ここでは〈нъ〉と綴るのは珍しい。
 当時のロシア語の正書法において〈ъ〉は主に硬子音で終わる場合に語末に
 付加する。光太夫はロシア語の綴りはいちいち単語単位で覚えたらしく、上
 の場合で〈ъ/ь〉の混同を生じない。しかし帰納的にこの両者の区別を理解
 していなかったように思われ、したがって、日本語をロシア文字で表記する
 場合に〈ъ/ь〉のどちらをつかうべきか迷うようにみうけられる。しかし、
 語末という意識から〈ъ〉と綴った可能性もある。cf. 36, 37。最後に〈一
 斗〉を〈їдтоо [イトトオ]〉のように長音に発音するのは光太夫の郷里の方
 言と関連する。現代でも長音として発音するようだ。以上この資料は短いな
 がら種々の興味ぶかい点を含む。

35.——軸装。写真43参照。大きさ縦 32.5 cm 横 36.5 cm。ロシア語のみ
 で、はじめ3行に〈Мѣігѣуя. Татамі. =] по. уѣны. Мачуно. =] каге. [メイゲ
 ツヤ タタミノ ウエニ マチュノ カゲ=名月や畳のうへに松のかげ]〉。
 右下に違い棚様に〈Ды. коо.〉とある。頭文字は筆記体大文字。出典は榎
 本其角の一句で『雑談集』^{註36}所収。〈ッ〉の表記に2様みられる。

〈Меігецу [名月]〉と〈ц〉を用いるものと〈Мачу [松]〉の〈ч〉を用いる場合。光太夫は両方にゆれる。また文字〈я〉の書き方が18C風のヴァリエント〈ѣ〉で、7の浄瑠璃本欄外書き込みにみられる形と同様であり、他の文字の書き様も仔細に観察できる資料である。

36.——写真44参照。白い和紙に書かれ37と同じ体裁で台紙に窓をあけてはめこむ。大きさ縦8.8 cm 横9.1 cm。やはりロシア語のみで、37同様すべておなじ大きさの文字で書かれる。はじめ3行で〈юкусуева. тага=] хадафурен. беніно.] ханъ. [ユクスエワ タガハダフレン ペニノ ハン]〉とある。右下に〈Даі. коо.〉と名がある。前者の出典は平賀源内の「神靈矢口渡」初段中九条揚屋の段の冒頭〈行ッ 末_エは誰_ガはだふれん_{ベニ}紅の花。案じ過_ルしを枕に語れ。〉より。大系本の注^{注37}によれば、〈行末は〉は『西華集』^{注38}などにみられる芭蕉の句であり、紅の花を遊女と見たてて下へ続く³⁷とある。第1行の〈誰が〉は〈таги〉のように〈а〉の筆記体が〈и〉のそれのように書かれているが、〈тага〉のつもりで書いたものであろう。〈行末は〉の〈は〉の子音〈в〉は18C風のヴァリエント〈п〉で書かれる。〈ン〉が〈н〉と〈нъ〉の2様に書いてある。前者は語中ゆえ〈н〉1字で綴り、後者は語末ゆえ〈нъ〉と綴るのであろう。cf. 34 〈[百篇] хядпень〉。もう一つの解釈をのべる。専門家によれば浄瑠璃で〈花〉は〈はんな〉のように撥音を付加して語る場合があり^{注39}、あるいはこの〈はんな〉の〈ん〉を強調して〈ханъ [ハン]〉のように綴った可能性もある。以下は筆者の考えだが、もし〈はんな〉であれば、〈はん〉と2拍で綴ったのは、光太夫において〈行末は〉以下が、当然ながら俳句と意識されていて、最後の行を5拍で止めるために〈はん〉と書いたのではないかと想像される。

37.——写真45参照。色紙に書かれ、台紙に窓をあけてはめこむ。大きさ縦11.5 cm 横10 cm。うす墨色に横に雲のような紋をもつ色紙にロシア文字のみで、すべて大よそ同じ大きさの文字で書かれる。まず3行で〈камѣ.] цюжюно. ка=] жуы. наръ. [カメ チョオジュノ カズイ ナル]〉

とする。次に棚違い風に二行で〈исе. даы.] коо. [伊勢。大光]〉とある。前者は〈亀。長寿の嘉瑞なる。〉と読めるが〈наръ〉は文字の上からは〈ナル〉のように語末で〈ル〉の無声化したものともとれるが、光太夫が jers を混同しがちであることから〈ръ〉かもしれない、そうであれば〈り〉であって、〈ナリ〉すなわち〈也〉かもしれない。諸書で〈ナレ〉と読むが正しくない。出典は今のところ未詳としておく。綴りの上では〈цiо жiю〉は、〈長〉の長音を〈цiо〉と〈tsjo〉のように短音で綴りしかも子音は〈ц〉をつかう。cf. 8 に〈長 тчо〉×〈丞 дзiо〉×〈兵 хiо〉の綴りがみえる。〈寿〉はしばしばみられるように〈жiю〉と余分の〈i〉を含む。〈кажуы〉の〈ズ〉に〈жу〉をあて、これもしばしばみられる綴り。署名の〈даы〉の頭は筆記体小文字である。

38.——写真46参照。大きさ縦 16.0 cm 横 31.1 cm。和紙に書かれ、紙の中央に〈графъ.〉と〈伯爵〉を意味するロシア語を大書する。語末の〈фъ〉は正しく綴られている。右下に違い棚風に〈Даы.] Коо.〉と書く。頭文字の〈Д〉は活字体の大文字。9を除き、ロシア語そのものを書いた例としては、10とともにきわめて珍しい。この〈графъ〉なる単語は光太夫にとり忘れえぬ人物〈アレキサンドル・アンデレウィチ・ベスポロッコ〉あるいは〈ガラフ・アレキサドル・ウッロマノウィチ・ウッロンツォーフ〉に結びつく。ことに前者は一時心からうらんだ相手であり、『絵本写宝袋』欄外書き込み中、黒々と消した文字は〈Г〉で始まり途中〈6〉を含み、前後関係から〈伯爵_{ガラフ}ベスポロッコ〉と書いたことが歴然としており、この〈графъ〉なる単語と光太夫の因縁の深さが、かかる書蹟を残さしめたのであろう。

4 資料の分類と内容

以下は別稿で述べたことと重複するが、まとめの意味をこめて必要点のみ再述する。上記の資料はまず時間によって2分しうる。すなわち光太夫滞

魯中のものと帰朝後のものであり、この場合帰朝時の寛政4年(1792)が境となる。しかし実際には、資料10と11の間に大きな時間差がある点は考慮の要があるだろう。その理由づけは別に行なわねばならないが、ここではとりあえず①滞魯時から帰国直後：資料1～10、②文化9年以降：11～27、③年紀なし：28～38、に分けておく。次に資料にあらわれる文字は、ロシア文字と漢字・仮名の日本の文字の2種といえるが、資料としては④ロシア文字のみ、⑤日本の文字のみ、⑥ロシア文字と日本の文字の両方をつかうもの、の3種である。内容については全体からみて、従来いわれているように光太夫は書蹟にかぎればめでたい文字や語句を好んだというが、これは追認してよかろうと考える。実際は次のような内容になっている。

- ① ロシア語の単語：〈Енуарь〉〈графъ〉
- ② 洋数字：〈1…13〉
- ③ 日本語（漢語を含む）の単語等：
 - a) 〈福寿〉
 - b) 〈南山寿〉
 - c) 〈鶴〉
 - d) 〈亀〉
 - e) 〈松〉
 - f) イロハ〈イ…ス, 京〉
- ④ 日本語の文章（俳句・漢詩を含む）：
 - a) 〈李白一斗詩百篇〉
 - b) 〈名月やたたみのうへに松のかげ〉
 - c) 〈行く末は誰が肌触れむ紅の花〉
 - d) 〈亀, 長寿の嘉端なる〉
 - e) 〈魯西亞中興国王…〉

5 文字感覚と到達点

上に資料中の文字やその書きぶりにつきこまごま述べたが、まとめてみれば次のようになる。光太夫は文字の異体を好んだ。さらに〈音通〉や〈好字〉をたくみに用いた。さらにやや悪達者な書きぶり遊び心が加わって、光太夫一流の書跡が残された。これは日本の文字についても遺墨中のロシア文字についても共通していえることである。ただし、ロシア文字については、どうやら滞魯中の初期教育——おそらくはキリル・ラクスマンによる——がよろしかったらしく、すくなくともロシア滞在中のロシア文字は基本に忠実であり、時として達筆の域に達している。さらに、今日でも日本人にとりにがてであるところのパンクチュエーションの初歩すなわち文末にピリオドをうつことは徹底して教育されたようにみうけられ、ロシア文字を綴る時は終生これを遵守している。ロシア文字の形は、帰朝後の揮毫に際し、デフォルメを受けて、とくに18C風のひげかざり部分が極端にはしるが、しかしよく観察するとやはり基本はくずしていない。文字の形は18C風であって、したがって当時としては普通のことからであった同一字のヴァリエントが使われる。このことは光太夫の好みにあうことであった。

光太夫はロシア文字をローマ字のように使って日本語を綴った。滞魯中にまとまった文章としては2つの例がしられているにすぎないが、あるいは今行方不明の『露文日記』^{註40}と称されているものにも、ロシア文字によるローマ字綴りの文章が含まれているのではなかろうか。それはともかく、その綴りの実際において今日でも方法として混乱しがちな点でゆれを生じているもののまずまず成功している。とりわけ促音表記に〈д〉1字のみを後続音のいかににかかわらずすべての場合に使用するという方式を用いている。これは光太夫の独創ともいうべきもので、表音文字に突如対面させられた江戸期の日本人としては、小さからぬことであったに違いない。高く評価しう

るであろう。

上の様な事柄が一体となって、後の書跡は彼独特の書風をもつにいたった。ひとつの〈型〉をなしたというべきである^{注41}。

光太夫自身の署名における用字の問題についても、上述の諸点をおさえておけば、理解の範囲内にあるといえる。光太夫自身の基本形は漢字表記では〈大黒屋光太夫〉であったろう^{注42}。だが、資料上では66才（文化13年・1816）ごろから〈屋〉をはずして〈大黒光太夫〉と記すようになる。その際年令の後に〈翁〉を付加する。（例外あり）。〈音通〉および〈好字〉のゆえに、〈光〉を〈幸〉、〈太夫〉を〈大夫〉あるいは〈太輔〉と誌すことがある。また〈大黒〉を〈大黒〉とすることがある。そこには時の経過にしたがって一方から他方へ一方的に変化することがなく、ときに可逆的に用いられる。なお〈光太夫〉の用字には叔父の名〈幸太夫〉が対立していることを想起する必要がある。ロシア文字による表記ははじめキリル・ラクスマンあたりから〈даикоуя Кóдаю〉の表記を一義的に与えられたと推量する。ここでは長音〈光_こ〉を示すのにアクセント符を用いる。このアクセント符つきの綴りと文字の形までを光太夫はすくなくとも滞魯中は墨守する。一方、早くから〈даи Ко〉の表記も有した。〈光〉は長音を無視してここでは母音字1字でしか表記されていない。しかし帰朝後の遺墨では〈Дав. Коо.〉が基本となってゆく。すなわち〈大_{だい}〉の〈イ〉は〈и〉ではなく多くの場合〈ы〉を用いるようになり、〈光_{こう}〉の長音は母音字2字を重ねて書く。しかも字体を活字体・筆記体・大文字・小文字をさまざまに組み合わせて、意匠的に記しているのである。なお母音字2字を重ねて書く方法は早く次の表記中に認めることができる。すなわち資料8中の〈Камя хюооо. [亀屋兵蔵]〉^{注43}の〈-юо〉の部分である。ただし〈-оо〉は長音を無視している綴りであることにも注意せよ。まとめて記せば、以上のように署名の用字法につき筆者は考える。

6 むすびに

光太夫の書跡資料はおそらくまだこの先に出現するであろう。しかしながら上で検討しそれによって得た知見の枠を大きくはずれることはないように思われる。漂流と滞魯経験さらに一国を動かしての帰朝と、光太夫の剛胆さと僥倖には目をみはるばかりであるが、残された資料を読みとくことによって、言語面から興味ぶかい光太夫像をわれわれはかいま見ることができるのである。

[謝辞] 本稿を草するにあたり次の諸機関および諸氏に協力をえました。記して謝意を表します。

ゲッチンゲン大学図書館，国立公文書館，早稲田大学図書館，古河歴史博物館，市立函館図書館，鈴鹿市教育委員会，Dr. Helmut Rohlfing，加藤優，柴田光彦，原道生，福田榮次郎，鷹見本雄，辻正，山口俊彦，富田和千節，内山ます，樋口房麿，河野辰雄，宮本立江，清水恵

N.B. Thanks are due to Dr. Helmut Rohlfing and Niedersächsische Staats- und Universitätsbibliothek Göttingen for permission to use the photographs.

注

- 1) 各資料から得た語学的分析の結果については次の別稿を参照のこと。本稿はこれと対をなすものである：岩井憲幸〈大黒屋光太夫書蹟資料の語学的側面〉「明治大学人文科学研究所紀要」40冊，1996年12月刊行予定。
- 2) 詳細は次を見よ：岩井憲幸〈ゲッチンゲン大学蔵大黒屋光太夫筆日本図について〉「明治大学教養論集」通巻269号，1994年12月。
- 3) 上掲論文および次を参照せよ：伊藤恵子〈アッシュ・コレクションの背景(上)(下)〉「窓」85・86号，1993年6月・9月；同〈ドイツ資料から見た大黒屋光太夫——アッシュ・コレクションの背景——〉「比較文学研究」65 東大比較文学会1994年7月。
- 4) 筆者上掲論文参照。
- 5) 以下光太夫の名前の表記の問題については次を見よ：林基〈大黒屋光太夫試稿(一)～(四)〉「窓」77～80号，1991年6月～1992年3月。ただし筆者の結論については本稿末を参照せよ。
- 6) 書簡の翻刻は次を見よ：『北槎聞略』(第3刷)〈解説〉pp.44-47，杉本つとむ『北槎聞略』〈解説〉pp.684-685。
- 7) 手紙本文の料紙中央部左右に〈КФ AX〉，下中央に〈1790〉とある。これはKlepikovによれば，クラスノエ・セローのアナ・フレーブニコワの工場製を示すマークであり，1790年製ということになる。クラスノエ・セローはペテルブルク近郊の村で，書簡用紙の製造でしられた。紙の製造年と，書簡の書かれた年1791年は矛盾しない。С. А. Клепиков, Филигранны на бумаге русского производства XVIII-начала XX века. М., 1978。
- 8) 光太夫が書いたのは1791年6月ゆえその約2年後にAschはこれを得たことになる。他に地図3点，浄瑠璃本1点も同時に入手された。
- 9) 上級司書イエレミア・ダヴィット・ロイス。ただし説明書きはアッシュの手という説もある。
- 10) 『森鏡』裏表紙書き込みは『光太夫の悲恋』のp.42に，『絵本写宝袋』上欄の書き込みは，同書p.61に一部分が，『魯西亜文字集』p.96に全部の写真が掲載されており，本稿はこれらによった。
- 11) 詳しくは岩井上掲論文pp.212-3注16を見よ。
- 12) 次を見よ：仲見秀雄〈遭難以前の大黒屋光太夫〉「三重の古文化」第71号，平成6年3月。
- 13) 高野明『日本とロシア』pp.112-119を参照せよ。
- 14) 参照：岩井憲幸〈「皇朝輿地全図」と『日本誌』所収日本図について——原図を求めて——〉「明治大学教養論集」通巻280号，1995年9月。
- 15) 『日本庶民生活史料集成』第15巻，三一書房，1971年。
- 16) 酒井憲二〈光太夫談話の伴信友筆記〉「東洋文庫書報」第23号，1991年。
- 17) 次の論文を参照せよ：亀井孝〈晩年の光太夫の横顔〉「日本歴史」第538号，

1993年3月。

- 18) 村山七郎〈大黒屋光太夫の言語学上の功績〉(『北槎聞略』第2刷, 昭和40年) p.17, 亀井高孝・村山七郎『魯西亜文字集』解説, p.77。
- 19) 亀井高孝『大黒屋光太夫』pp.204-206。
- 20) Словарь Академии Российской 1806-1822. (rep.: Изд-во при Университете Одессе, 1971).
- 21) Словарь церковно-славянского и русского языка, СПб., 1847. (rep.: Tokyo, 1989)
- 22) В. Дадь, Толковый словарь живого великорусского языка⁴, СПб.-М. (rep.: Tokyo, 1984)
- 23) M. Vasmer, Russisches etymologisches Wörterbuch, Heidelberg, 1953.
- 24) 好古社出版部, 明治36年4月。
- 25) この人物についての問題は林基上掲論文(三) pp.39-40を見よ。
- 26) 文字中〈io〉は〈io/ио/ё〉を示す。〈кю〉は〈イロハ〉の末に唱えられた〈京〉。〈ゝ〉は当時のハイフンである。
- 27) 鷹見本雄氏所蔵『魯西亜国字学』本文 p.V。写真20参照。鷹見泉石が光太夫から借りうけて文化10年(1813)に透写したもの。光太夫はおそらくこの本の原本によってキリル・ラクスマンあたりからロシア文字の基本を教育されたと考えられる。本書については次を見よ: 岩井憲幸〈鷹見泉石旧蔵ロシア語関係資料若干についての覚書〉「泉石」古河歴史博物館, 1990年。
- 28) 紺色表紙(元来は保護表紙)5針眼。末に〈役人共覚書/勢州河曲郡南若松村外国物由来之記〉とある。表紙の中ごろに〈勢州「木屋」若松〉の黒印あり。〈木屋〉はどこの屋号であろうか。この本はかつて中川ふさ女が所持していたものを同女が桶口博氏に贈ったものらしい。表紙貼紙に〈多謝樋口博殿〉とある。『あけぼの』p.84を見よ。
- 29) 跡見女子大学教授柴田光彦氏のご教示による。資料18中の文字についても同氏による。
- 30) 〈郷土遊寓名士遺墨展出陳目録〉昭和33年8月1日~3日開催を参照せよ。
- 31) 注16)を見よ。
- 32) 〈3・4・5・7・8〉などに注意せよ。
- 33) 中村楓水著。大正7年刊。昭和48年復刊による。
- 34) 上掲岩井論文〈ゲッチンゲン大学蔵大黒屋光太夫筆日本国について〉pp.187-8を見よ。
- 35) もっともこれは背後に音声学的分析があることが感じられ, おそらくロシア人の示唆があったろうが, 次に来る音が何であれ〈п〉1字のみに固定して用いることを始めたのは光太夫であったろうと推察される。ここに仮名の〈ツ〉との連想を見る。
- 36) 其角著, 元禄4年(1671)成立, 同5年刊。
- 37) 中村幸彦校注『風来山人集』岩波書店, 昭和36年。
- 38) 支考編, 元禄12年(1699)刊。

- 39) 明治大学文学部教授原道生氏のご教示による。
- 40) かつて林若樹の蔵するところであった。日本書誌学大系28『林若樹集』(青裳堂書店, 昭和58年)中の〈若樹文庫入札略目録〉の六, および〈余の蔵する近世名家の草稿〉を見よ。ここでは〈大黒幸太夫自筆露文雑記 一冊〉あるいは〈幸太夫自筆露文日記手控帳 一冊〉と称している。林基上掲論文(三)の注18(pp.45-46)も参照せよ。なお, 次の書の中に〈東京林若吉氏蔵〉の〈漂流人幸太夫日記ノ内〉として2枚の写真が掲載されている: 大隈重信『開国大勢史』早稲田大学出版部 大正2年。
- 41) 亀井高孝『大黒屋光太夫』p.199を参照。
- 42) 注5の林論文および注12の仲見論文を参照せよ。
- 43) 名前の〈亀屋兵蔵〉と〈大黒屋光太夫〉との関係については亀井高孝『光太夫の悲恋』中の〈大黒屋光太夫と亀屋兵蔵〉および仲見上掲論文を見よ。

参考文献

1. 亀井高孝『光太夫の悲恋』吉川弘文館, 昭和42年。
2. 亀井高孝『大黒屋光太夫』吉川弘文館, 昭和45年。
3. 桂川甫周編著, 亀井高孝校訂『北槎聞略』第3刷, 吉川弘文館, 平成元年(第1刷, 三秀舎, 昭和12年; 同再版, 昭和14年; 第2刷, 吉川弘文館, 昭和40年)。
4. 村山七郎『漂流民の言語』吉川弘文館, 昭和40年。
5. 亀井高孝, 村山七郎『魯西亜文字集』吉川弘文館, 昭和42年。
6. 高野明『日本とロシア—両国交渉の源流—』紀伊国屋書店, 1971年。
7. 杉本つとむ『北槎聞略—影印・解題・索引—』早稲田大学出版部, 1993年。
8. 大黒屋光太夫顕彰会編『あけぼの』平成5年。
9. 新村出〈伊勢漂民の事蹟〉『新村出全集』第6巻, 筑摩書房, 昭和48年。
10. 奥平武彦〈ギョツチンゲン大学図書館の日露関係文書〉「書香」第45号, 昭和7年12月。

付：参考写真

以下参考のために，許可をえて，写真を通し番号を付して掲げる。所蔵者等は次の通り。

ゲッチンゲン大学図書館：1・2・3・4・5・6・7・8・9・10・11・12

国立公文書館内閣文庫：13

早稲田大学図書館：14・15・16・17・19・31・44・45・46

鷹見本雄，写真提供古河歴史博物館：20・21・22・23

市立函館図書館：34・35

『あけぼの』より転載：18・24・25・26・27・28・29・30・32・33・36・37・38・39・40・42・43.

『河芸郡史』より転載：41

Photographic Acknowledgements

Niedersächsische Staats- und Universitätsbibliothek Göttingen (NSUG):
Fig. 1—12

The Cabinet Library, The National Archives of Japan: **Fig. 13**

Waseda University Library (WUL): **Fig. 14–17, 19, 31, 44–46**

Hakodate City Library: **Fig. 34, 35**

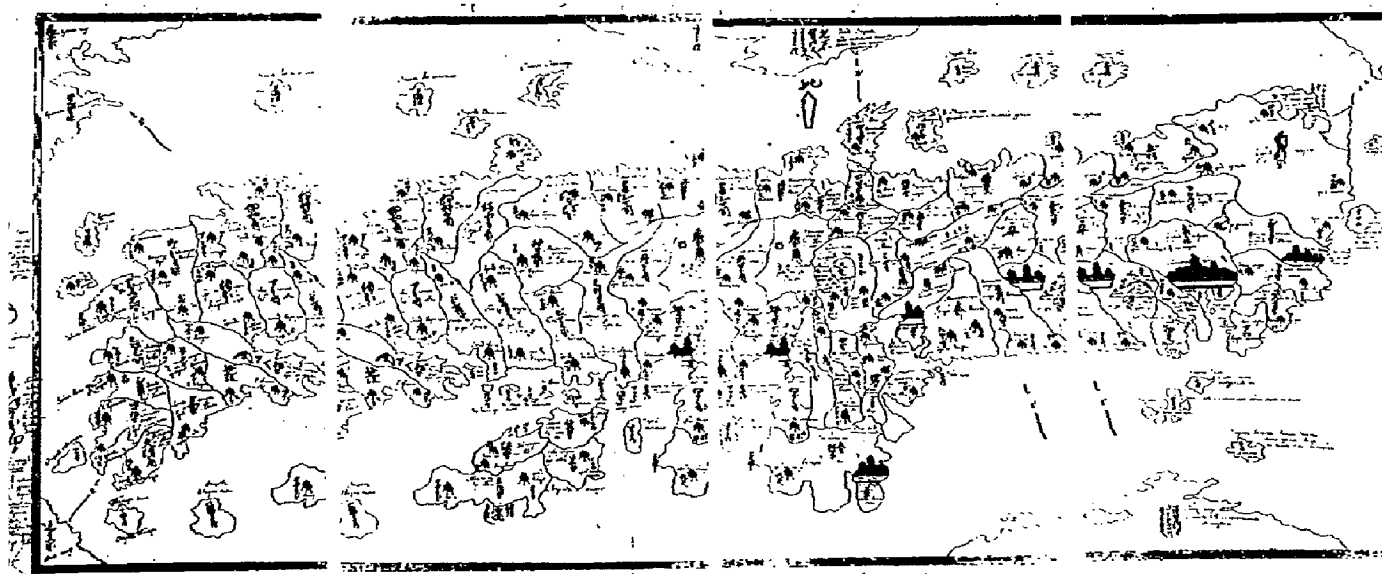
M. Takami: **Fig. 20–23**

From *Akebono*, 1993, Suzuka: **Fig. 18, 24–30, 32, 33, 36–40, 42, 43**

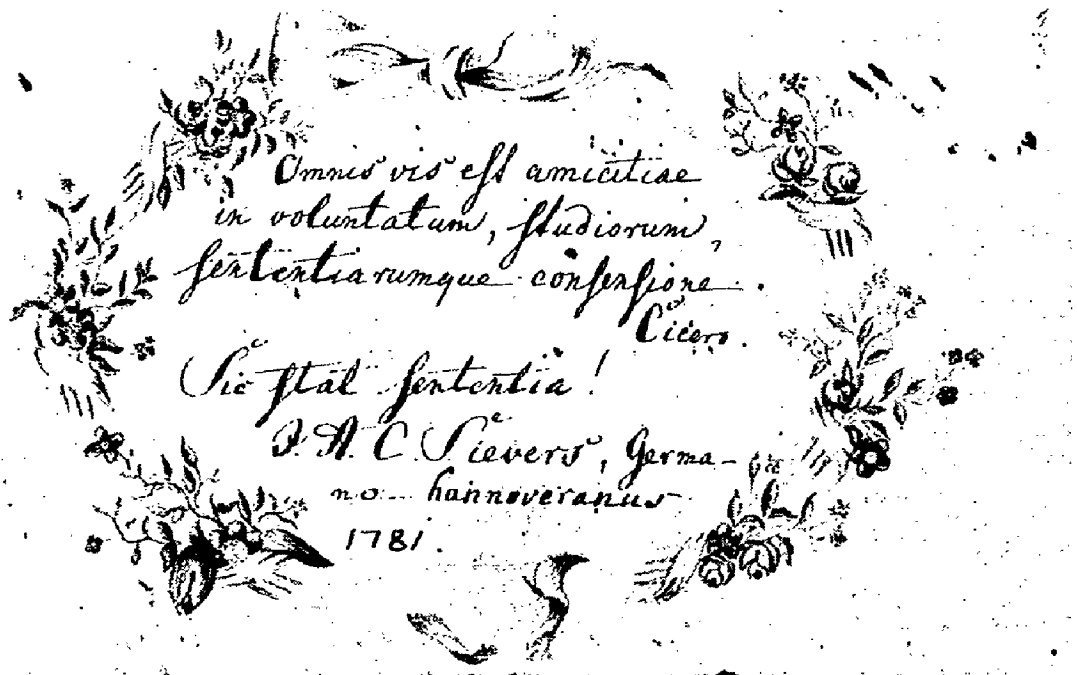
From *Kawage-gunshi*, 1973 (rep.): **Fig. 41**



1 ゲッティンゲン大学図書館所蔵日本地図 1789年 Asch 284
General Map of Japan, 1789 Cod. Ms. Asch 284, NSUG 65.5×126.5 cm



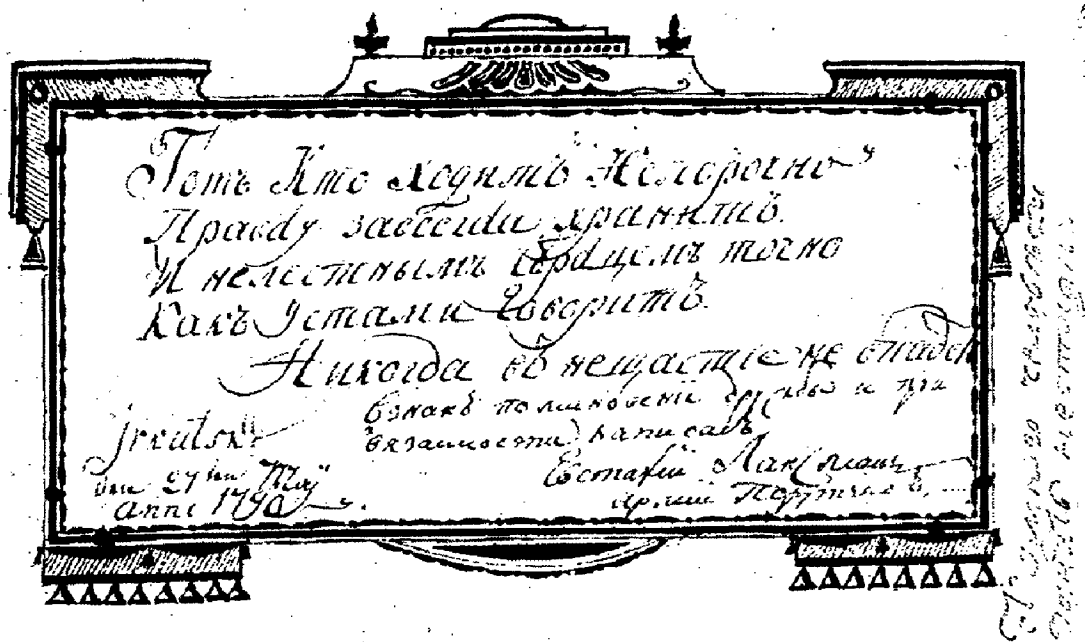
2 同上所蔵日本地図 1791年 Asch 285
General Map of Japan, 1791 Cod. Ms. Asch 285, NSUG 64.5×137 cm



- 7 同上所蔵シーファースの記念帳 2r, 1781年 扉 Cod. Ms. hist. litt. 48^w
Title page of J.A.C. Sievers' *Stammbuch*, 1781 Cod. Ms. hist. litt. 48^w,
NSUG 19.7×11.1 cm



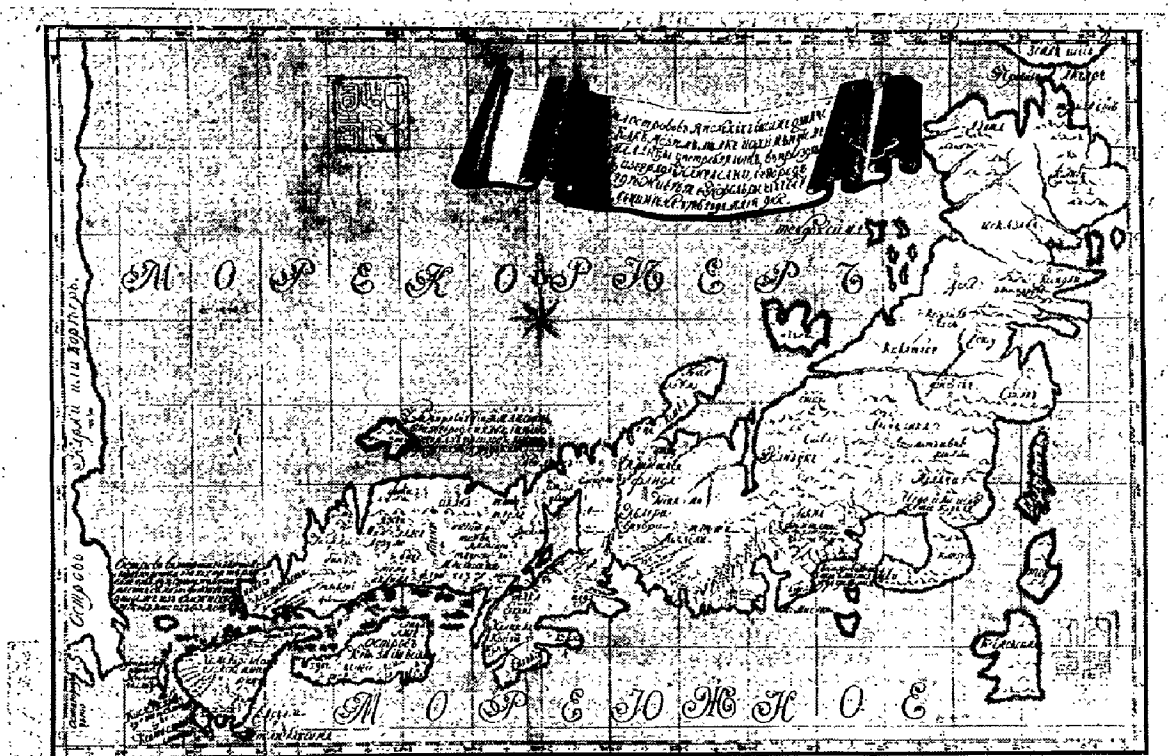
- 8 同上 42r キリル・ラクスマン書蹟と絵
Cyril Laxman's handwriting with sketch, *idem.*, 42r



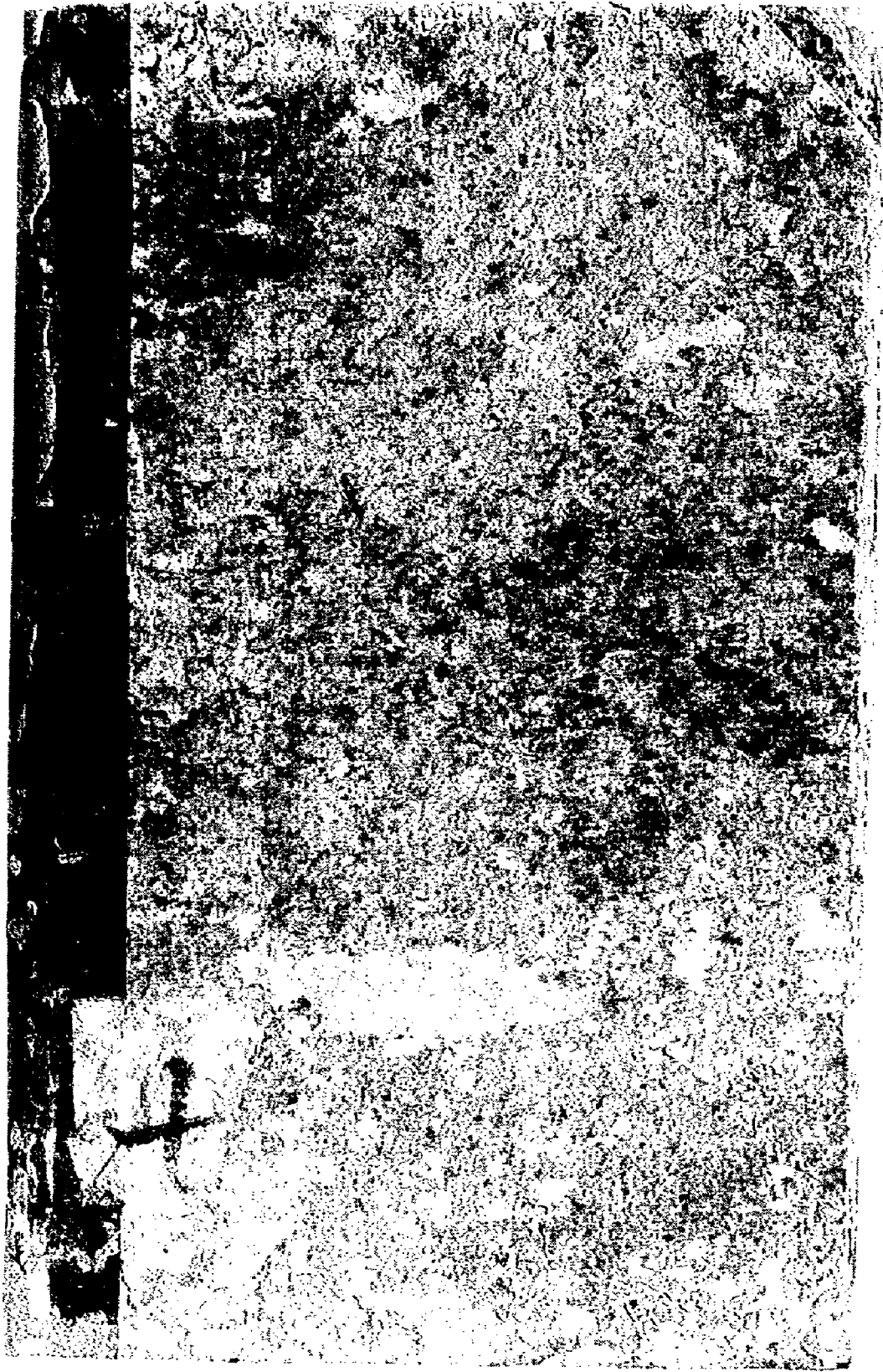
- 11 同上65r キリルの長男, エフスタフイイ・ラクスマンの書蹟
 Handwriting of Efstafii Laxman, son of Cyril *idem.*, 65 r



- 12 同上 80 v 光太夫肖像 1792年 天理図書館所蔵〈ヨロシヤ人小屋内図〉の
光太夫肖像と比較せよ。よく似ている。
Kodayū's portrait by Sievers, 1792 *idem.*, 80 v

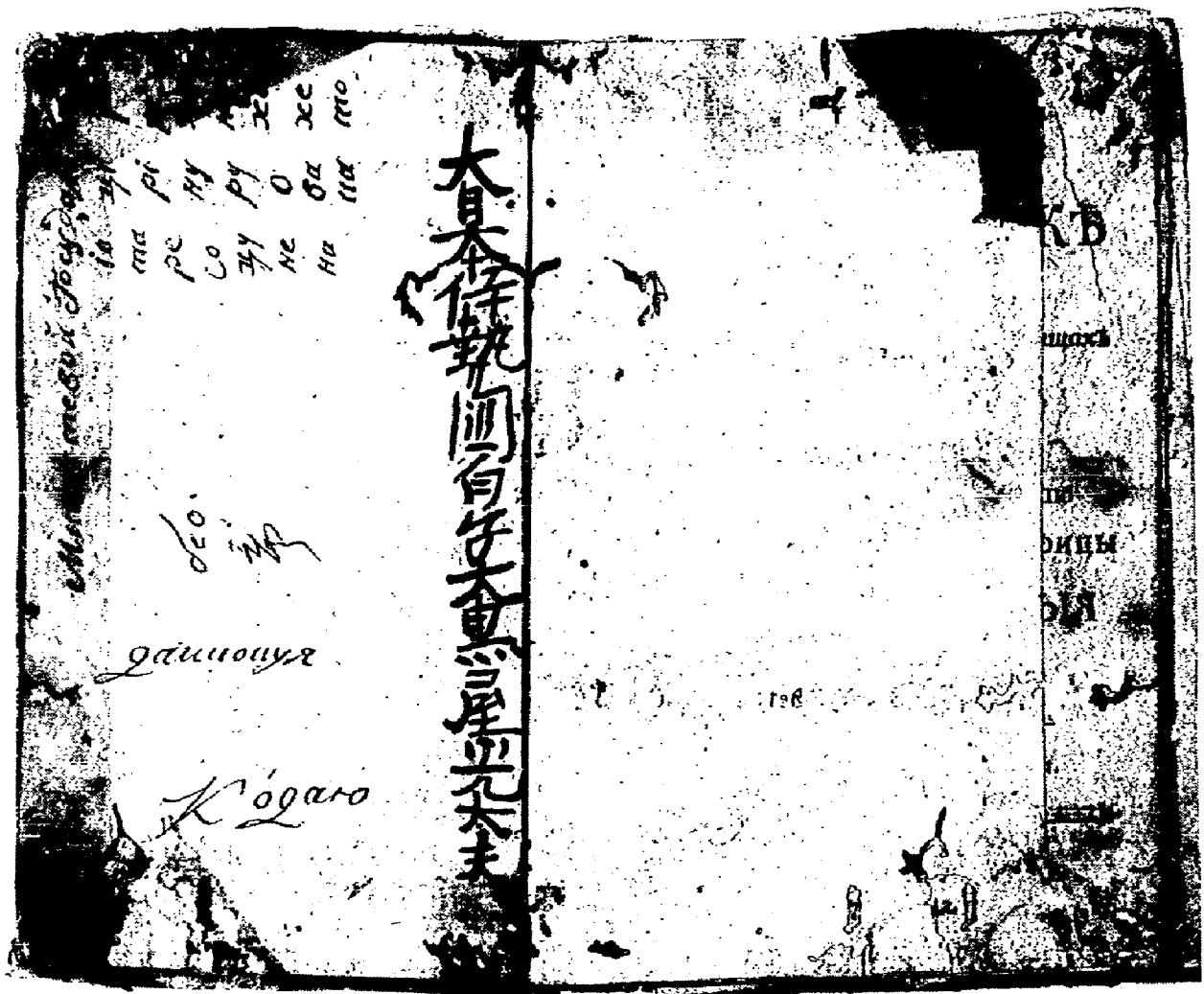


- 13 国立公文書館内閣文庫所蔵〈皇朝輿地全図〉 1793年
 General Map of Japan, 1793 The Cabinet Library, The National Archives of
 Japan 48.6×73.2 cm



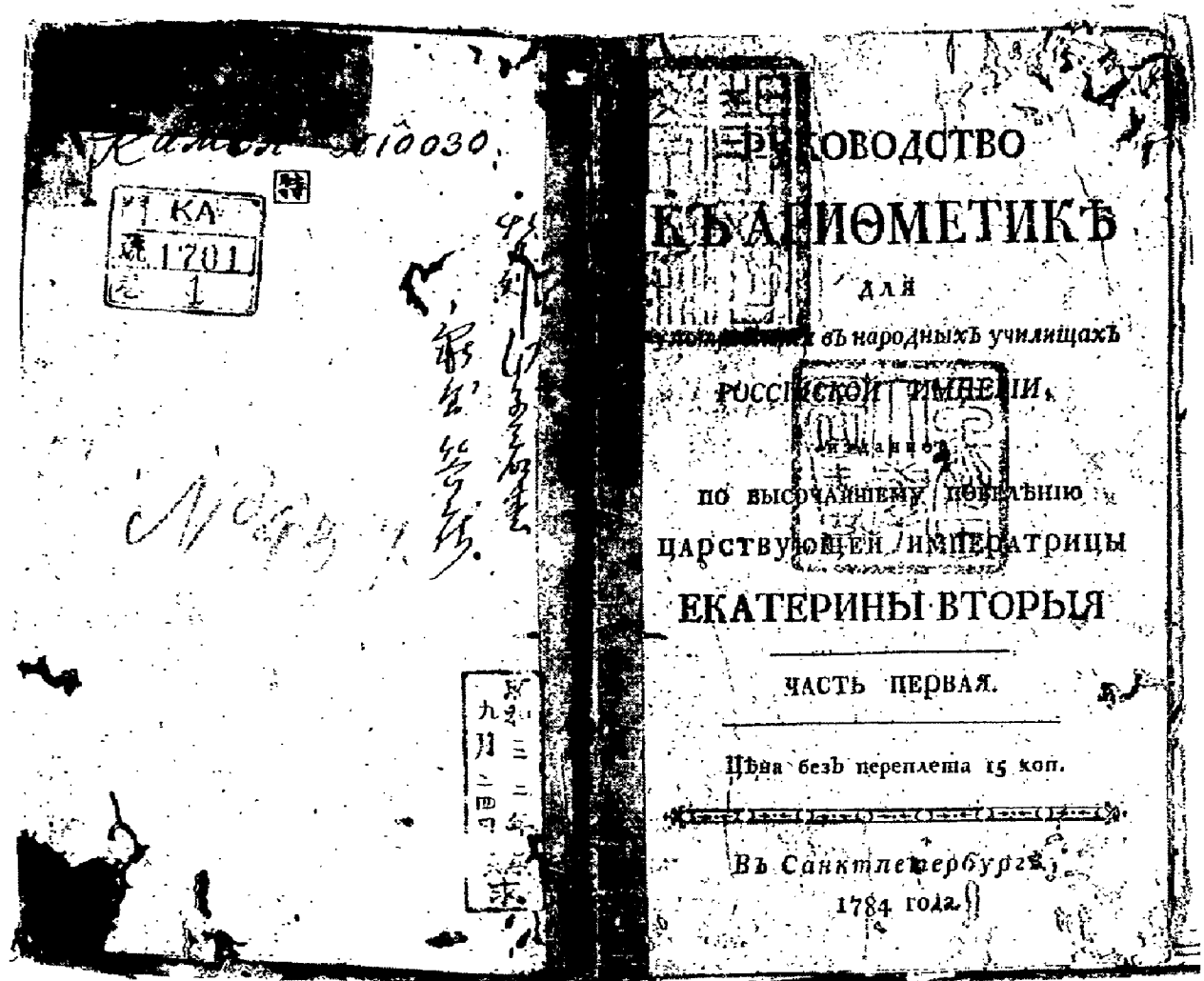
- 14 早稲田大学図書館所蔵『露国国民学校用算術入門書』表紙（補修後） 左側中ほどの革上の署名に注意。

Kodayū's signature in the Cyrillic alphabet on the leather spine binding of *Rukovodstvo k arifmetike*, 1784, SPb. WUL 16.3×10.2 cm



- 15 同上表紙裏見開き（補修前） ロシア文字と漢字による署名〈大黒屋光太夫〉が見える。

Front end-papers with signatures and notes by Kodayū *idem*.



- 16 同上タイトルページ見開き（補修前） 遊び紙裏のロシア文字と漢字による〈亀屋兵蔵〉の署名がみえる。

Title page and front end-paper, v, with signatures by Kodyū *idem*.

102

оба произведения должны быть равны, на прим: $12:18 = 8:27$.

Повѣрка: $12 \times 18 = 8 \times 27 = 216$.

Есплихъ первой часъ на мѣ-
сто прѣшняго, а прѣшнъ на
мѣсто первого пересѣваго, и
умножъ первой ч. въ ус-
твертымъ, а второй прѣшнымъ:
произведения ихъ должны быть
равны, на примѣрѣ: 8:18—12:27.

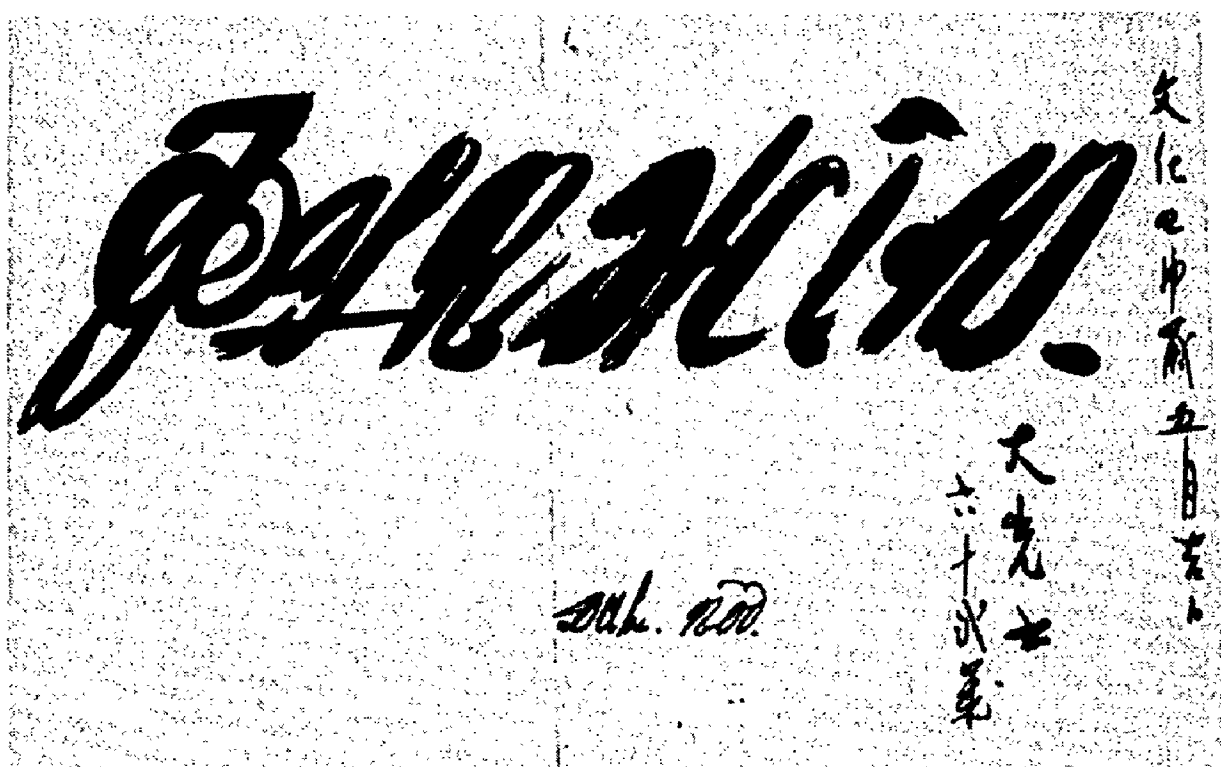
Повѣрка: $8 \times 27 = 18 \times 13 = 216$.

КОНЕЦЪ ПЕРВОЙ ЧАСТИ.

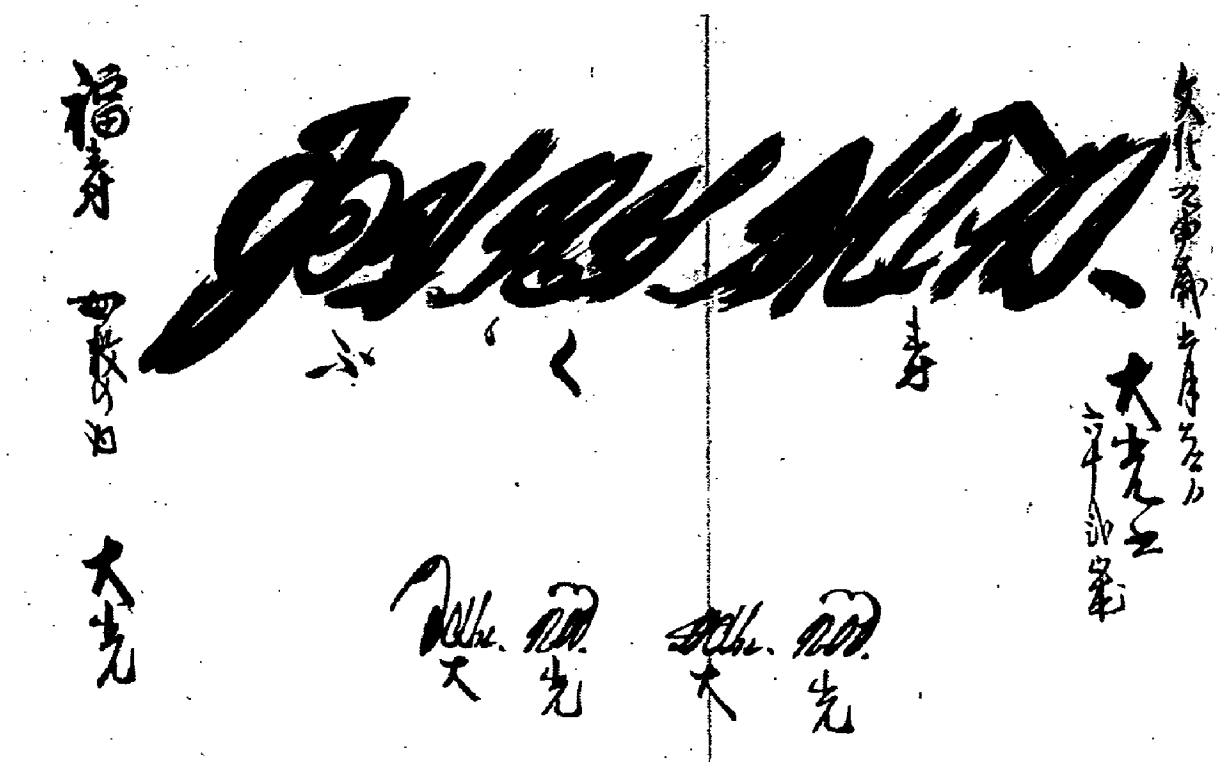


17 同上裏表紙裏 (補修前)

Back end-paper with notes by Kodayū *idem*.



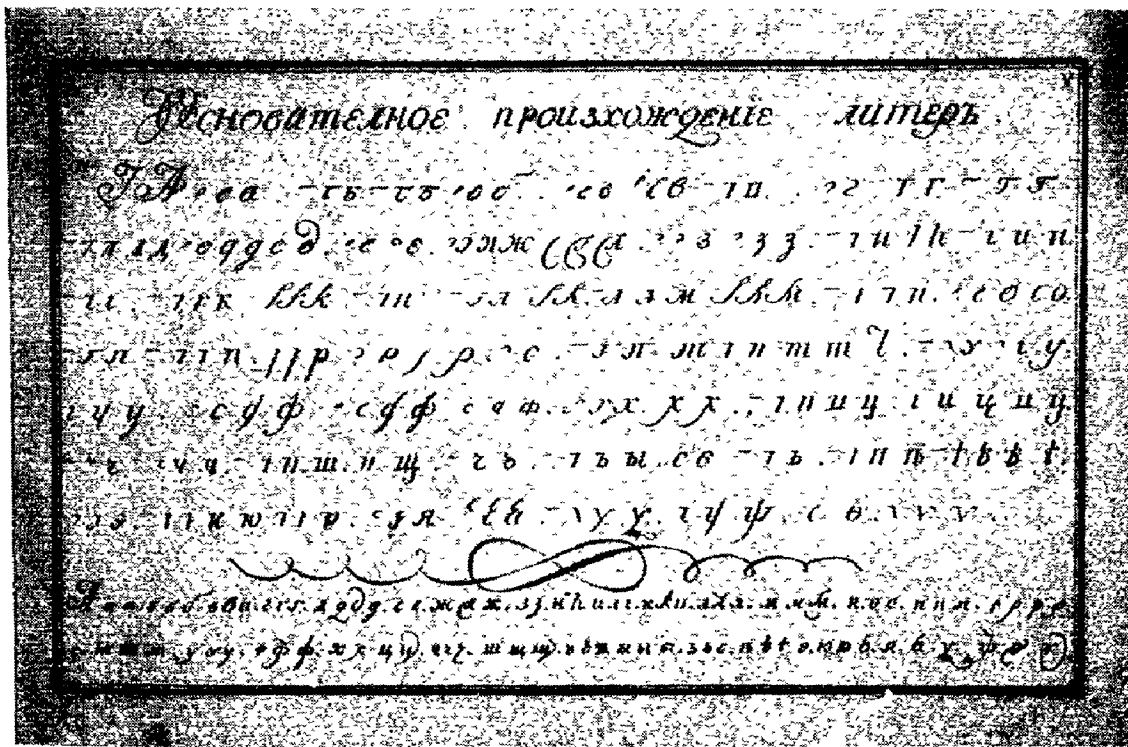
18 杉本龍造氏所蔵遺墨〈福寿〉 1812年
 "Fukuzyu", 1812 R. Sugimoto 29.0×46.5 cm



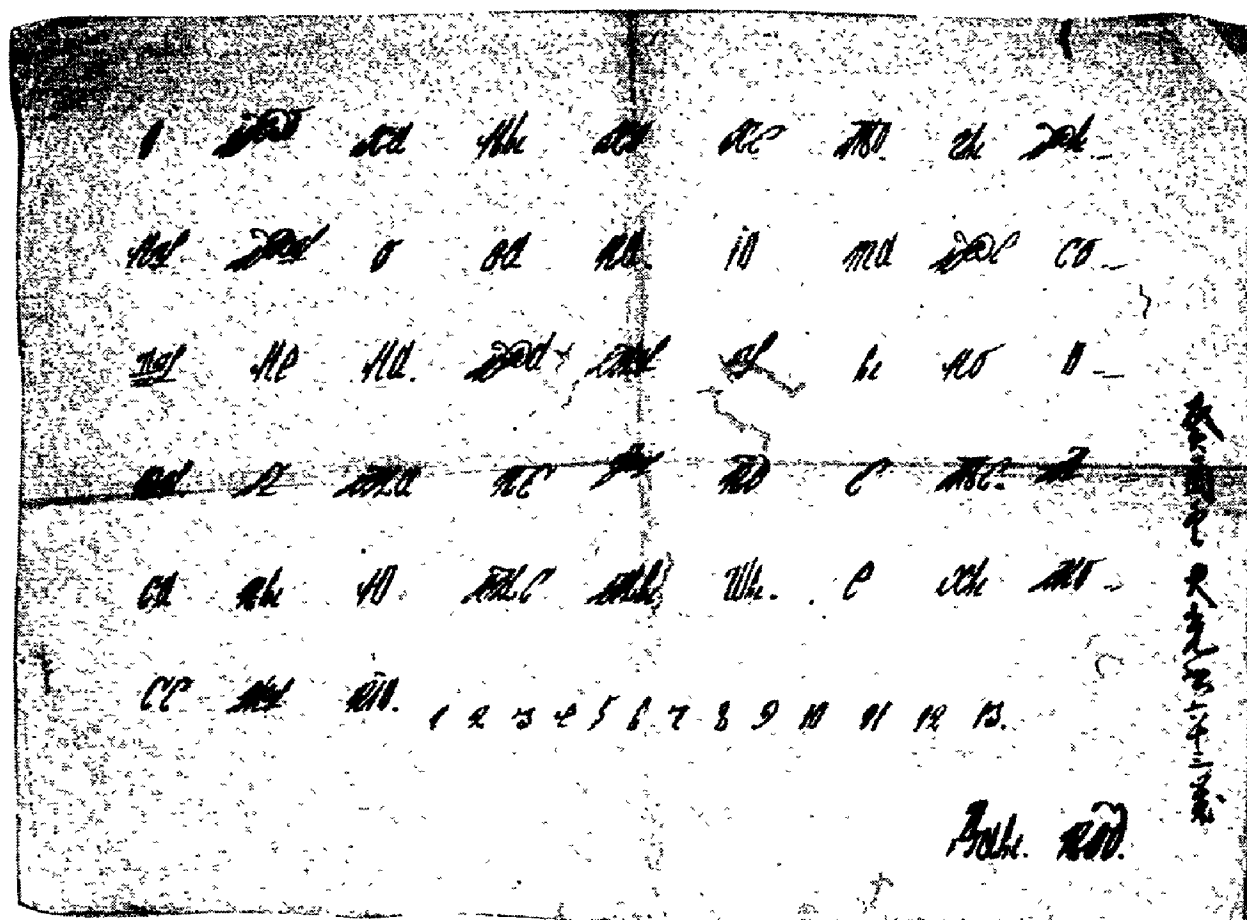
19 寺崎遜旧蔵遺墨〈福寿〉 1812年 早稲田大学図書館所蔵本『好書類纂』第十一集による
 "Fukuzyu", 1812 A copy in *Kōshoruisan*, No 11, 1903 WUL



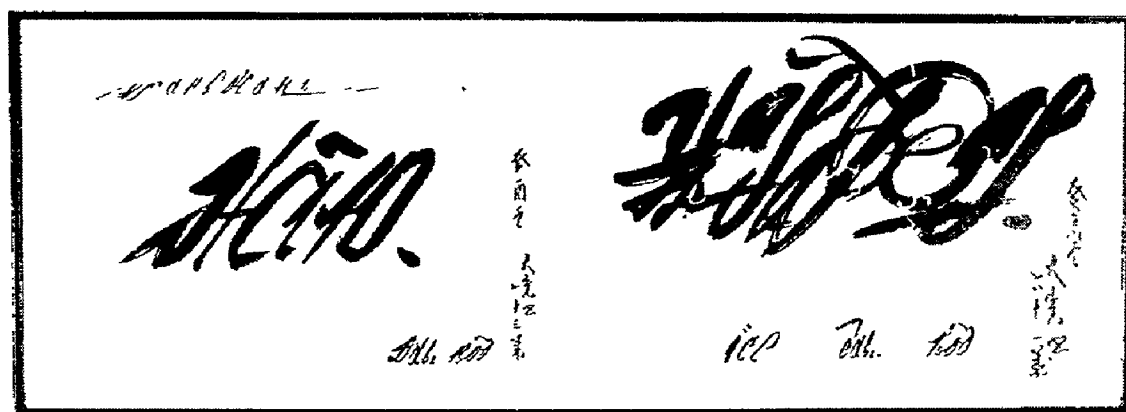
20 鷹見本雄氏所蔵，鷹見泉石写『魯西亜国字学』 タイトルページ 1813年
1813 copy by Takami Senseki of the title page of *Propis'*, 1787, Moscow M.
Takami 17.0×26.2 cm



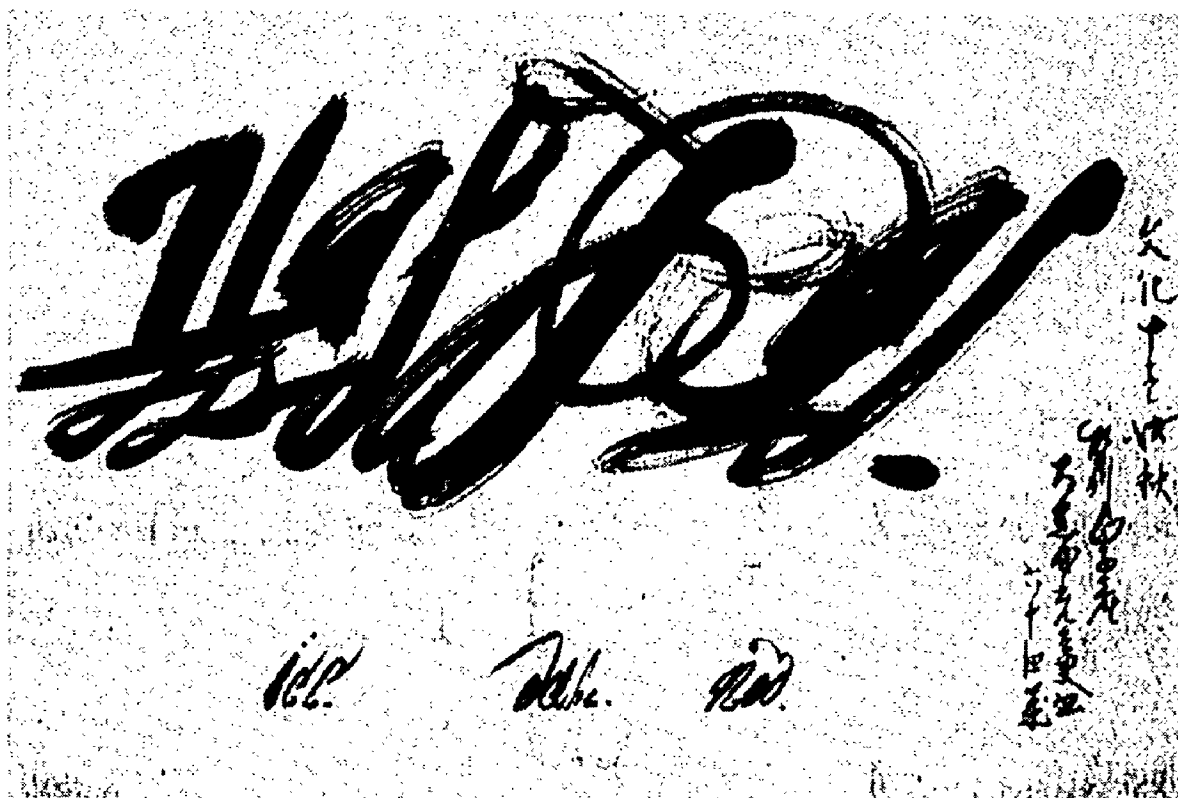
21 同上本文Vページ
idem. p.V



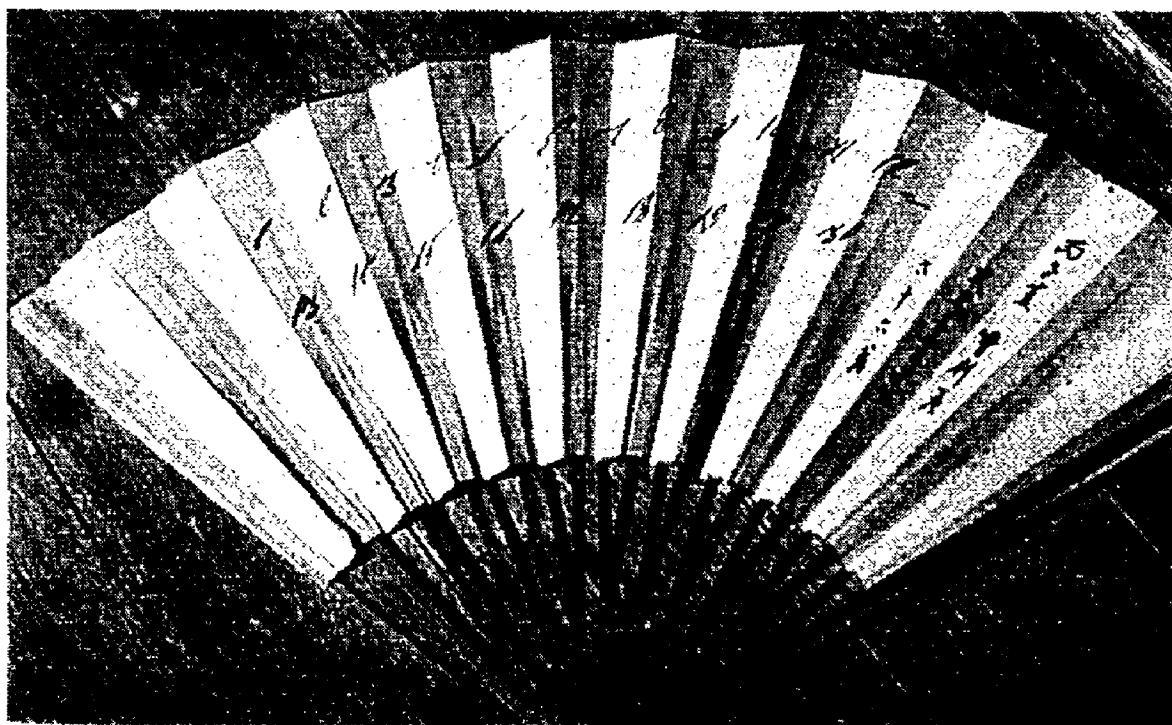
22 鷹見本雄氏所蔵遺墨〈イロハと洋数字〉 1813年
Japanese syllabary "iroha" in Russian letters with Arabic numerals, 1813 M.
Takami 33.1×45.0 cm



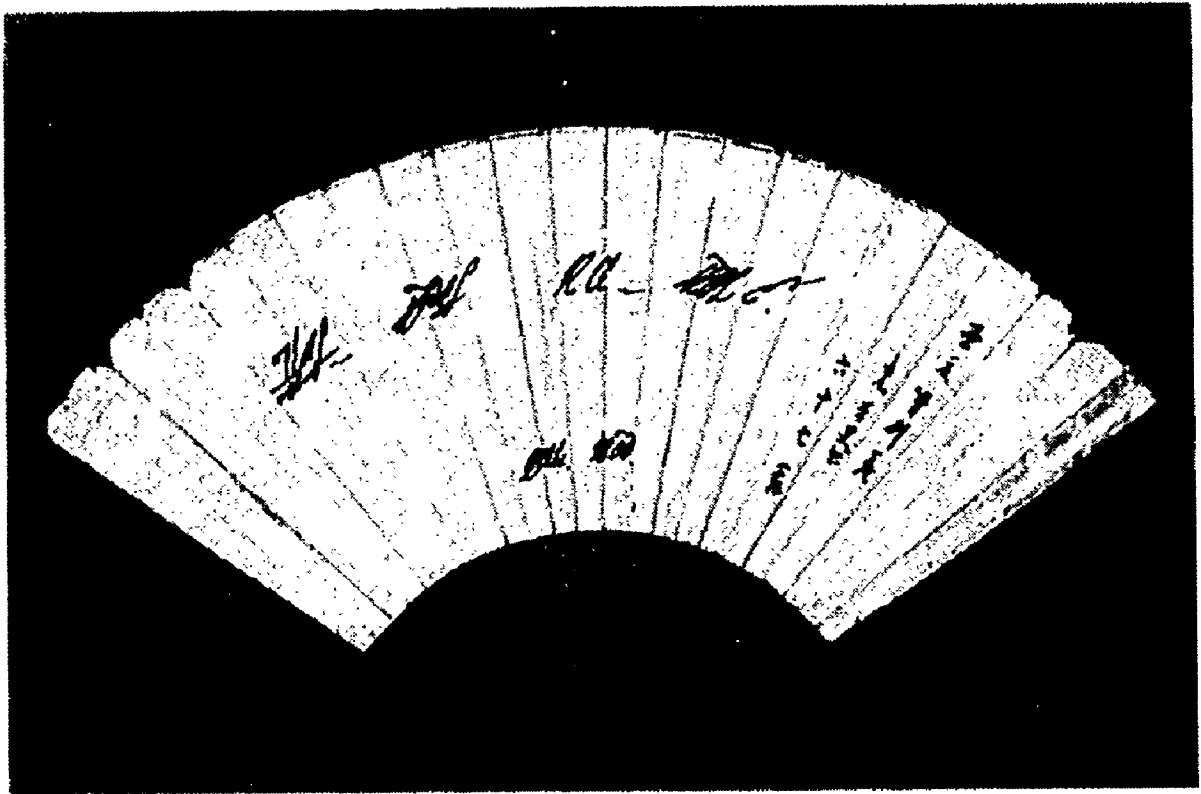
23 同氏所蔵遺墨2種〈南山寿〉〈鶴〉 1813年
"Nanzan zyu" "Tsuru", 1813 M. Takami 36.4×90.0 cm



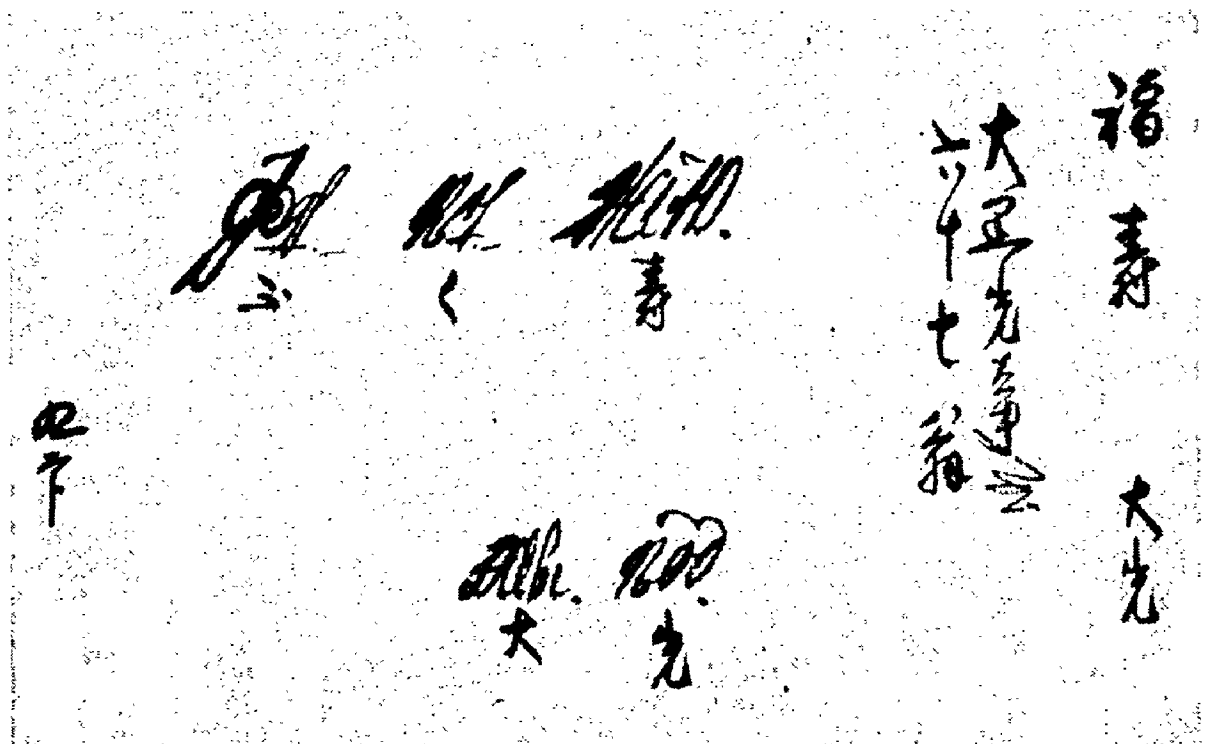
24 鈴鹿市教育委員会蔵遺墨〈鶴〉 1814年
"Tsuru", 1814 Suzuka City 31×48 cm



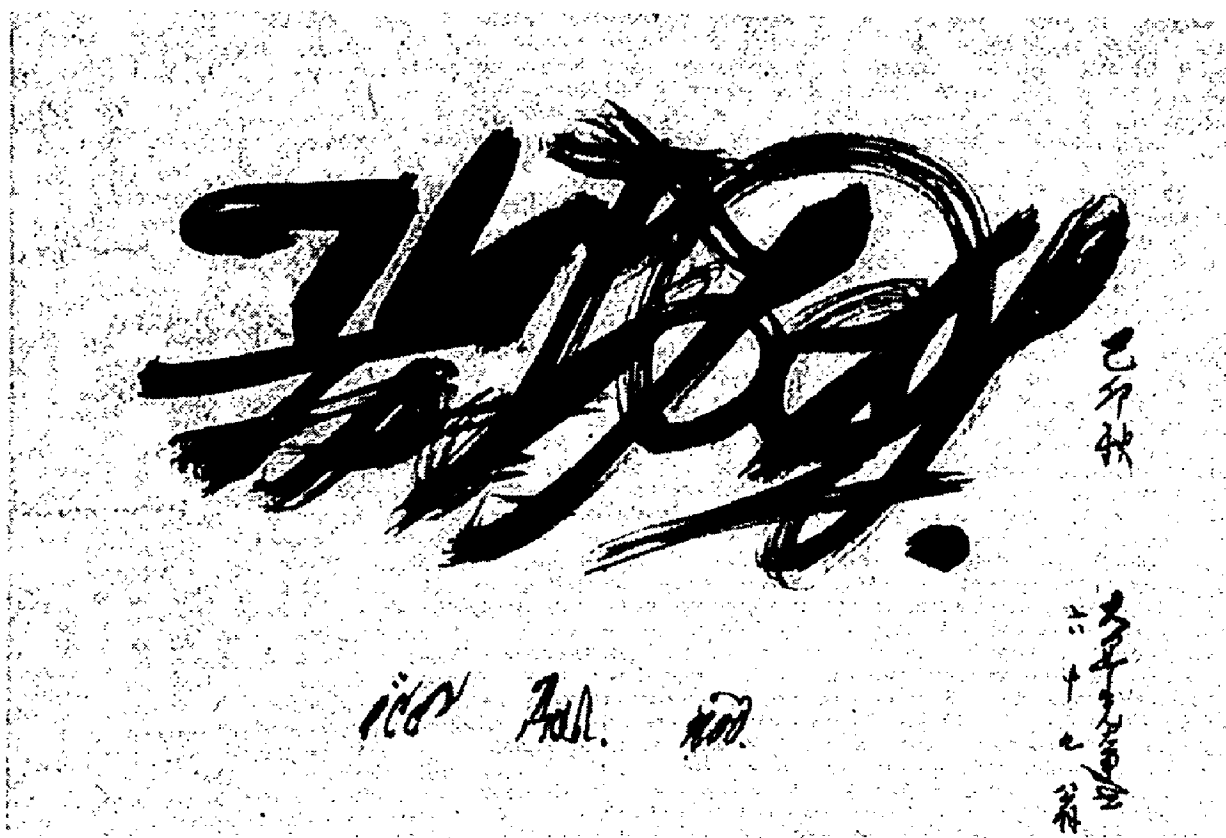
25 個人蔵遺墨〈洋数字〉 1816年
Arabic numerals on Japanese fan, 1816 31×48 cm



26 鈴鹿市教育委員会蔵遺墨〈鶴，亀〉 1817年
 "Tsuru, Kame" on Japanese fan, 1817 Suzuka City 17.7×48.5 cm



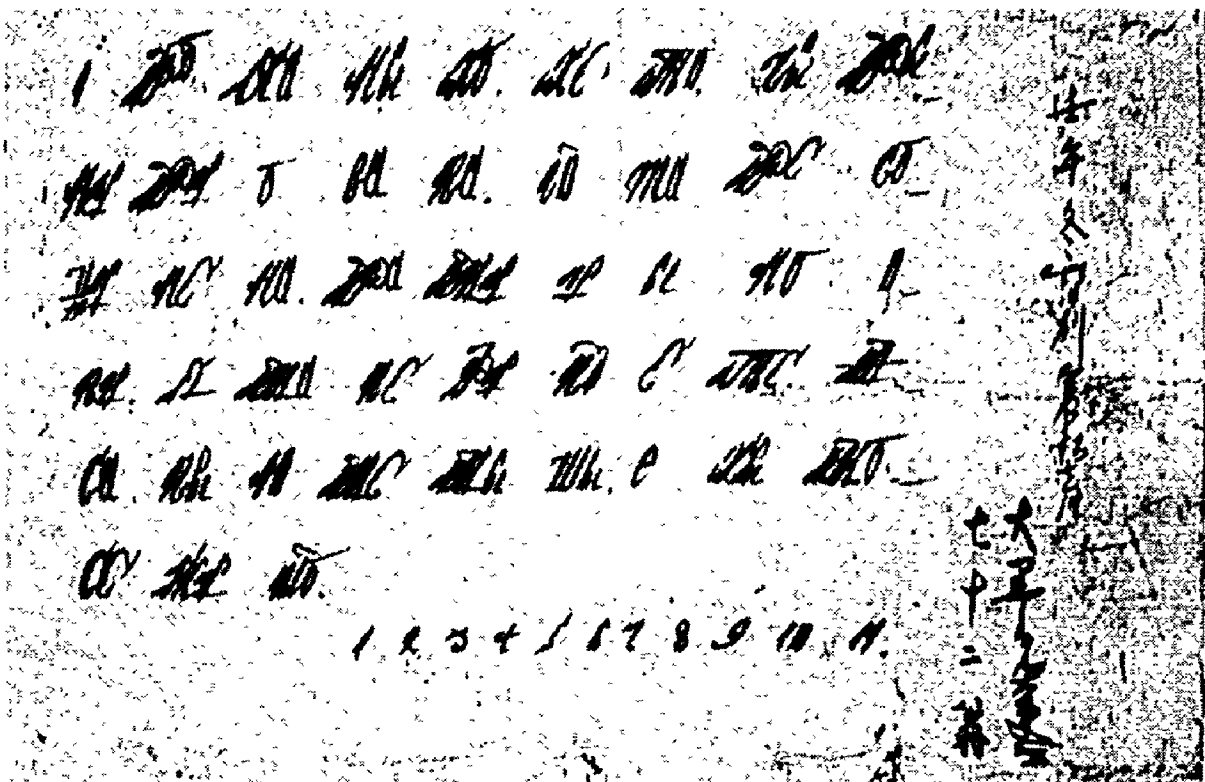
27 個人所蔵遺墨〈福寿〉 1817年
 "Fukuzyu", 1817



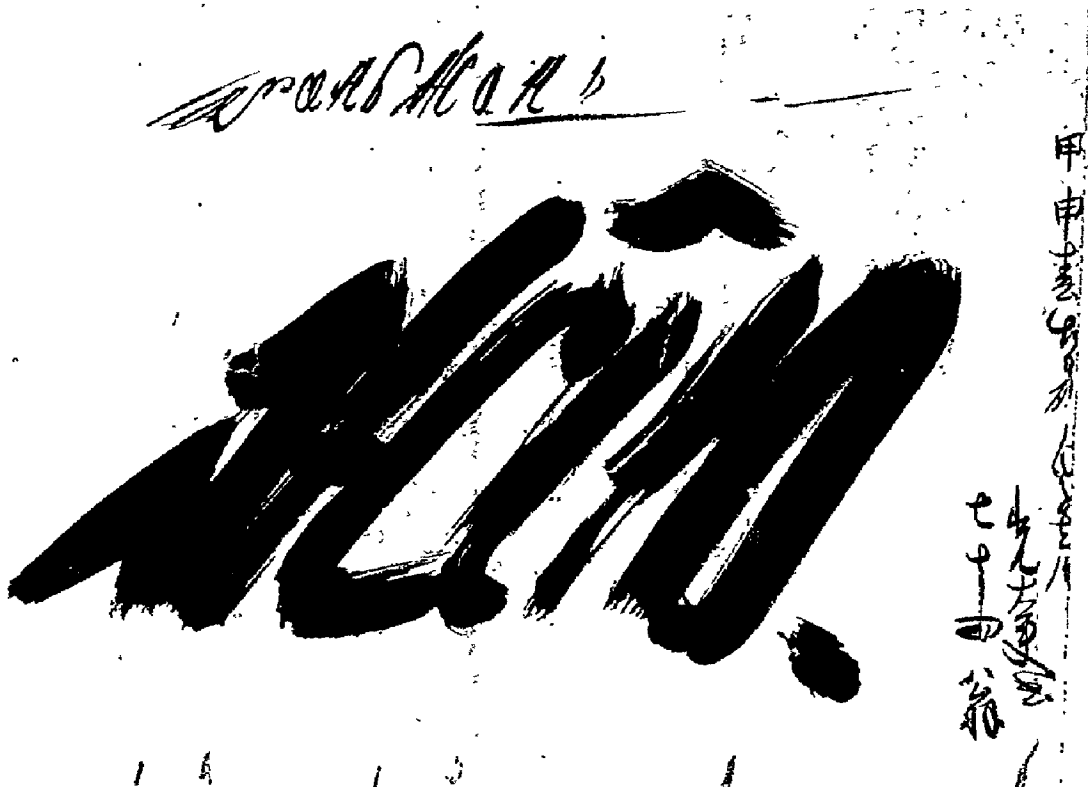
28 山口俊彦氏所蔵遺墨〈鶴〉 1819年
“Tsuru”, 1819 T. Yamaguchi 36.0×50.8 cm

芳海氏傳人とか
高小とせり市街
己卯秋
先生遺之
六十九翁

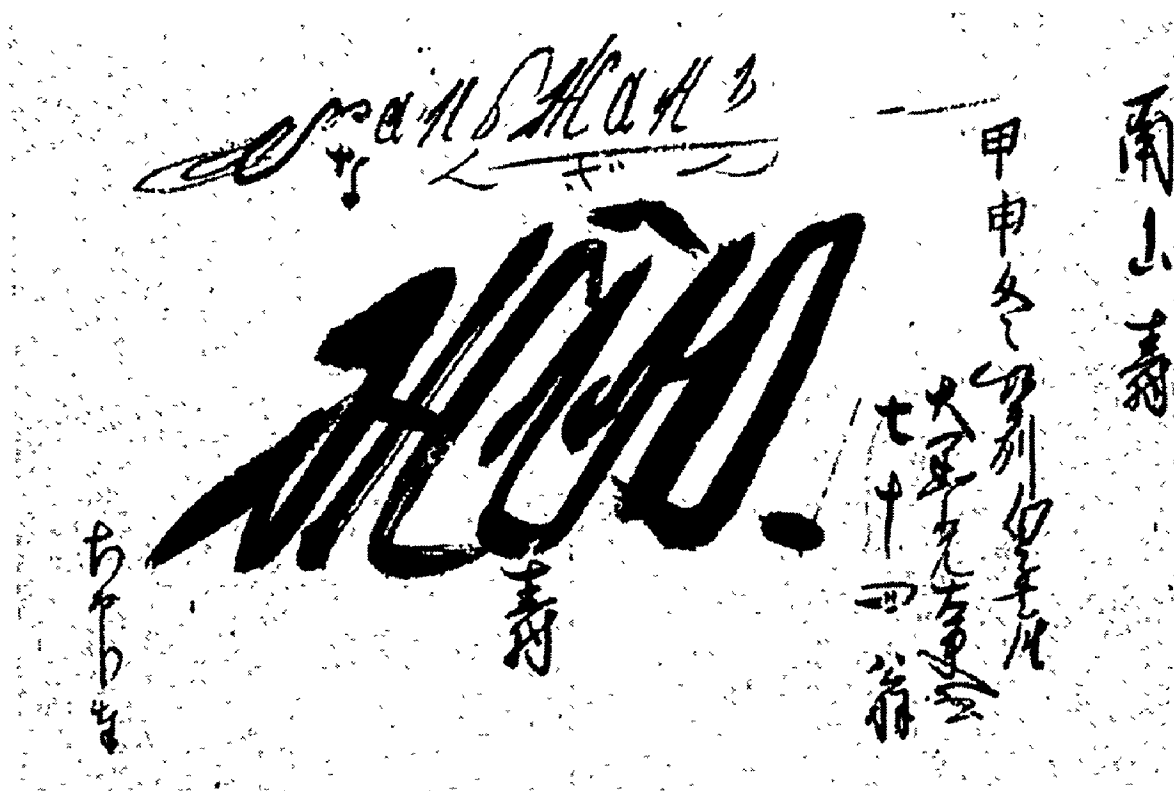
29 樋口房磨氏所藏遺墨〈平仮名〉 1819年
Japanese syllabary, 1819 F. Higuchi 24×9 cm



30 伊藤公毅氏所蔵遺墨〈ロシア文字によるイロハと洋数字〉 1822年
Japanese syllabary in the Cyrillic alphabet with Arabic numerals, 1822 K. Itō
32.0×46.5 cm



31 早稲田大学図書館所蔵遺墨〈南山寿〉 1824年
"Nanzan zyu", 1824 WUL 33.4×44.2 cm



32 個人所蔵遺墨〈南山寿〉 1824年
“Nanzan zyu”, 1824 23.2×33.5 cm



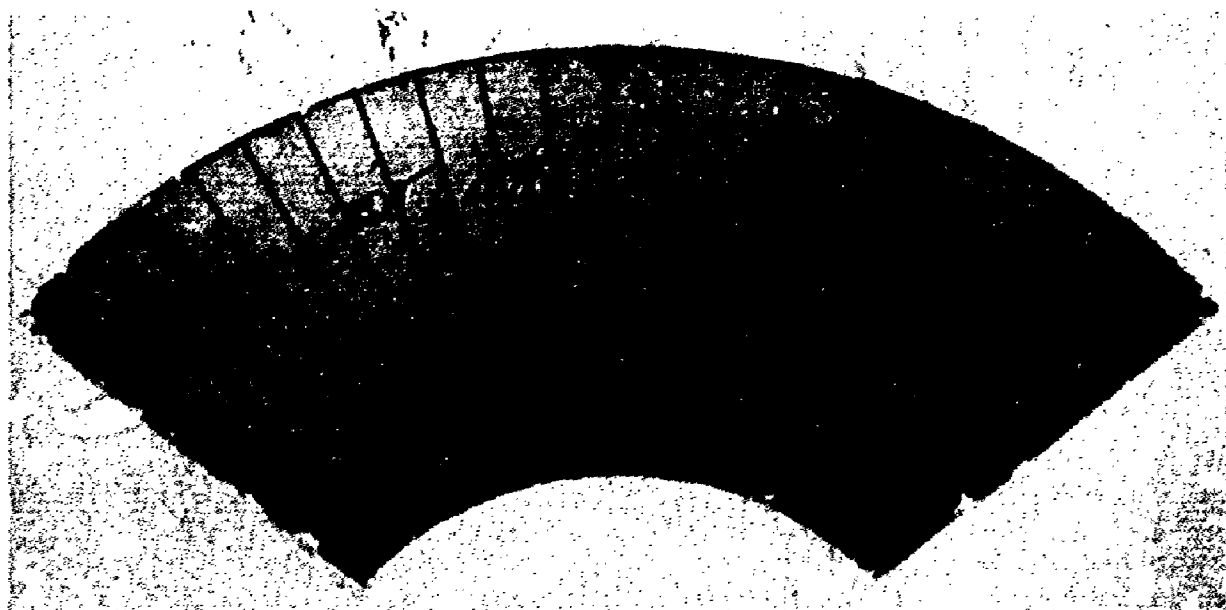
33 本田昭七郎氏所蔵遺墨〈鶴〉 1825年
“Tsuru”, 1825 S. Honda 22.8×34.0 cm

魯西亞中興國王
伯多祿帝八十八齡賀伊西波尼
亞國主花島画壽扇一握進
獻不當女主
亞瓦德利納亞烈起瘦納六
十一齡賀復尊崇以來城
樓二封壽然面予請歸國
則予本邦送還スルヲ
情ム不得止奏達ス不顧
女主赦フ乞暇時樓上ニ
居坐シ予ヲ召予カ掌上ニ
女主自ヲ弄扇ヲ載瞋賜ス

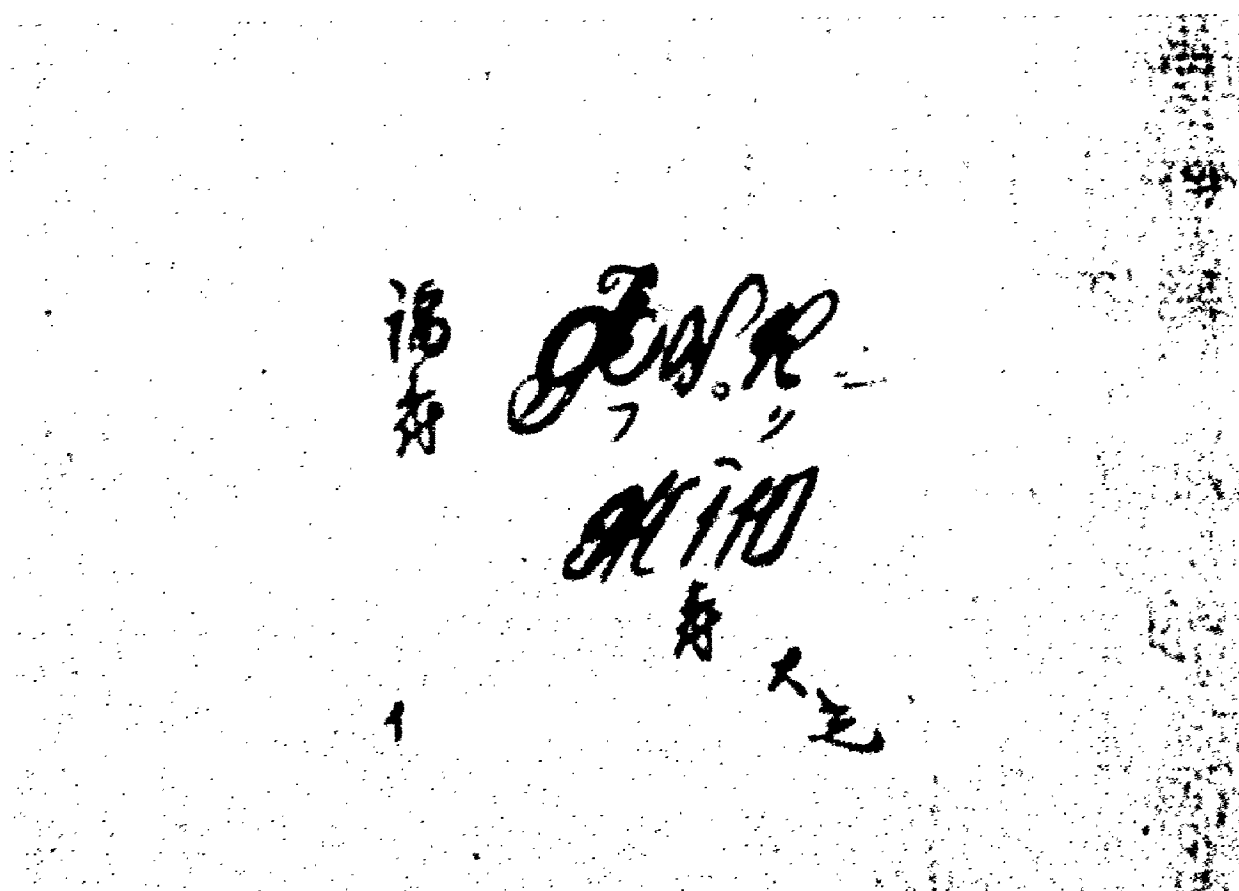
34 市立函館図書館所蔵光太夫喜寿賀詞（右半分） 1827年
Kodayū Congratulating himself on his 77th birthday: Right half, 1827 Hakodate
City Library 21.2×58 cm

女主赦ス乞暇時樓上ニ
居坐シ予ヲ召予カ掌上ニ
女主自ヲ弄扇ヲ載瞋賜ス
予誓首拝受ス早
予婦本邦
公都伎封稚子橋御庇
其後復審町御菓園守
移ル予七十七齡賀復為壽
扇尊祝者也
九月九日 幸太夫誌
大國彦

35 同上（左半分） 〈幸太夫〉と〈大國〉の用字さらに最後の花押様の〈七十七〉に注意せよ。
idem.: Left half



36 寺尾正一氏所蔵遺墨〈ロシア文字によるイロハと数字〉 数字の書き方に注意。
Japanese syllabary in the Cyrillic alphabet with Arabic numerals on Japanese fan,
n.d. S. Terao 16.5×44.0 cm

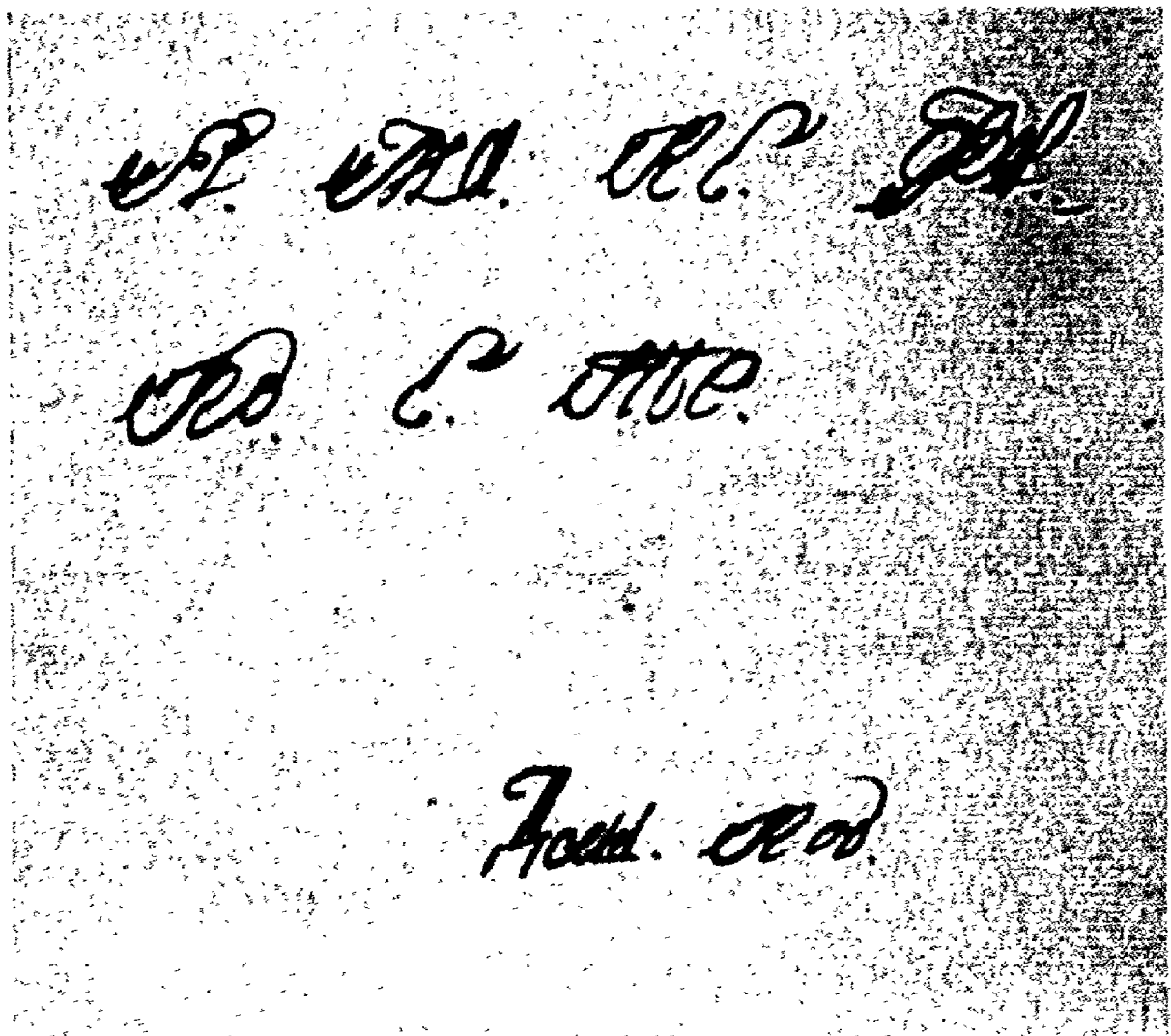


37 小池光雄氏所蔵遺墨〈福寿〉
"Fukuzyu", n.d. M. Koike 12.3×14.7 cm

i. 伊. 呂. 波. 何. へ. 卜.
伊. 呂. 波. 何. へ. 卜.
伊. 呂. 波. 何. へ. 卜.

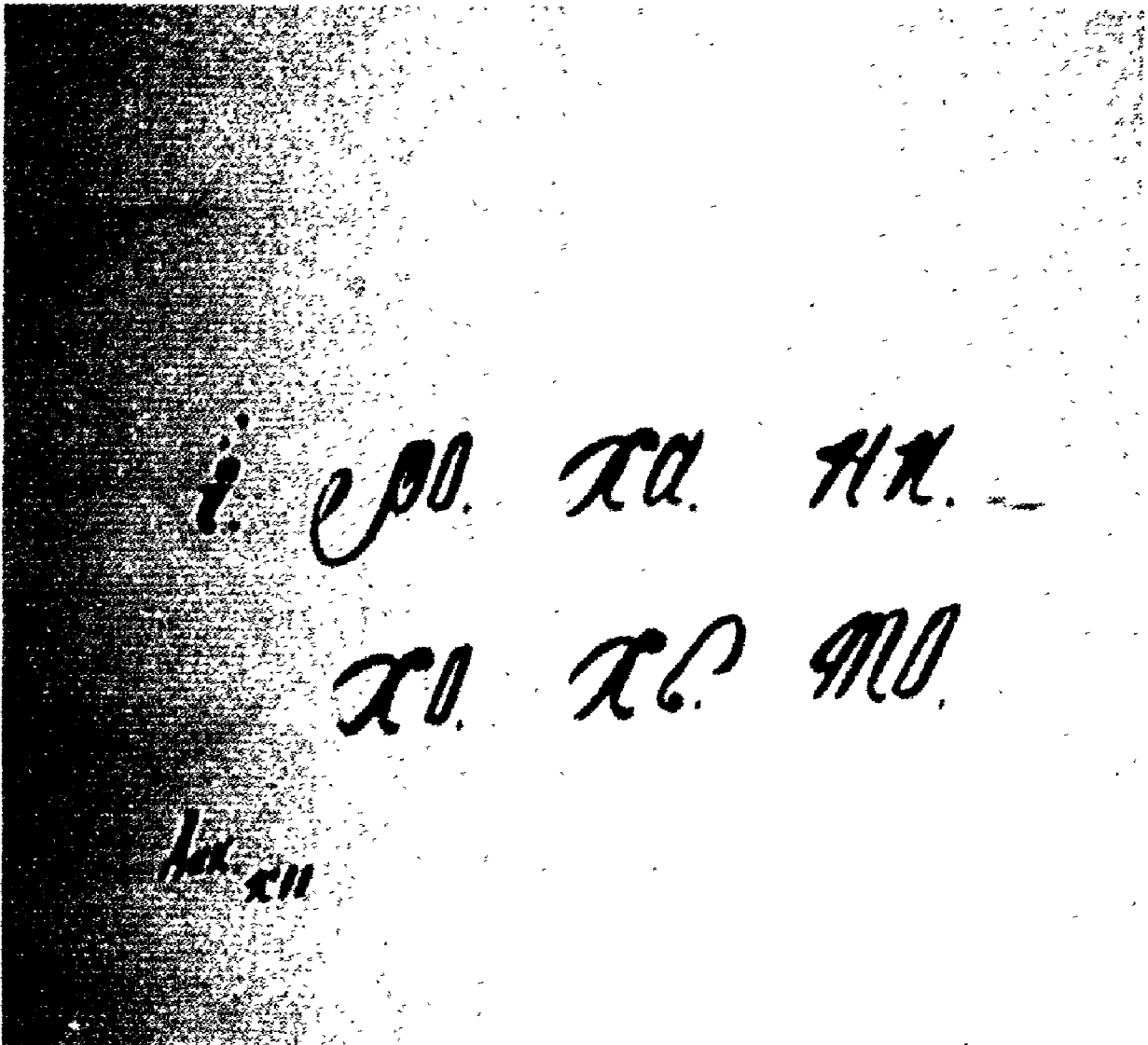
38 内山晉氏所藏遺墨〈イロハニホヘト〉

"I ro ha ni ho he to", n.d. S. Uchiyama 27.8×30.8 cm



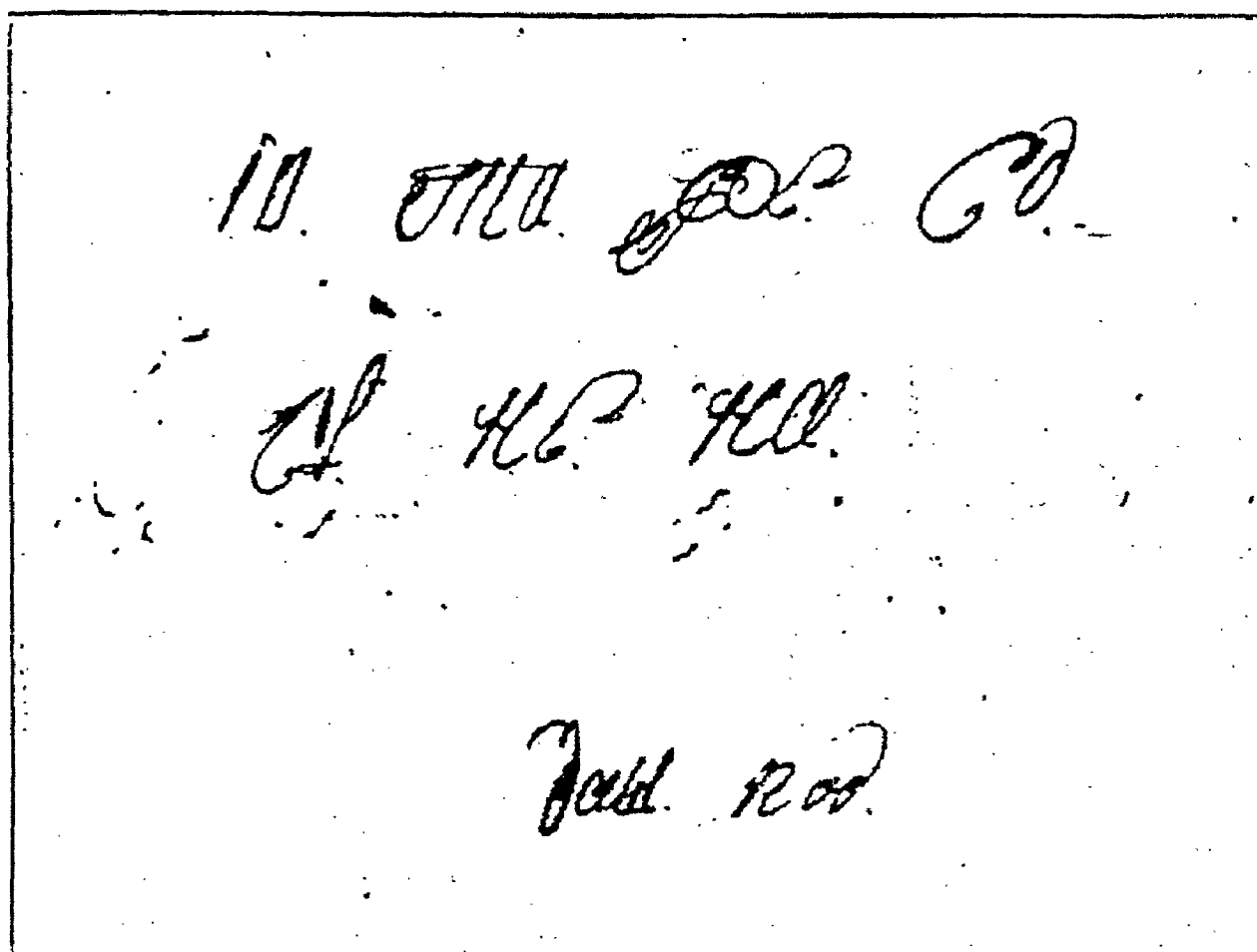
39 同氏所蔵遺墨〈ヤマケフコエテ〉

“Ya ma ke fu ko e te”, n.d. S. Uchiyama 27.5×30.8 cm



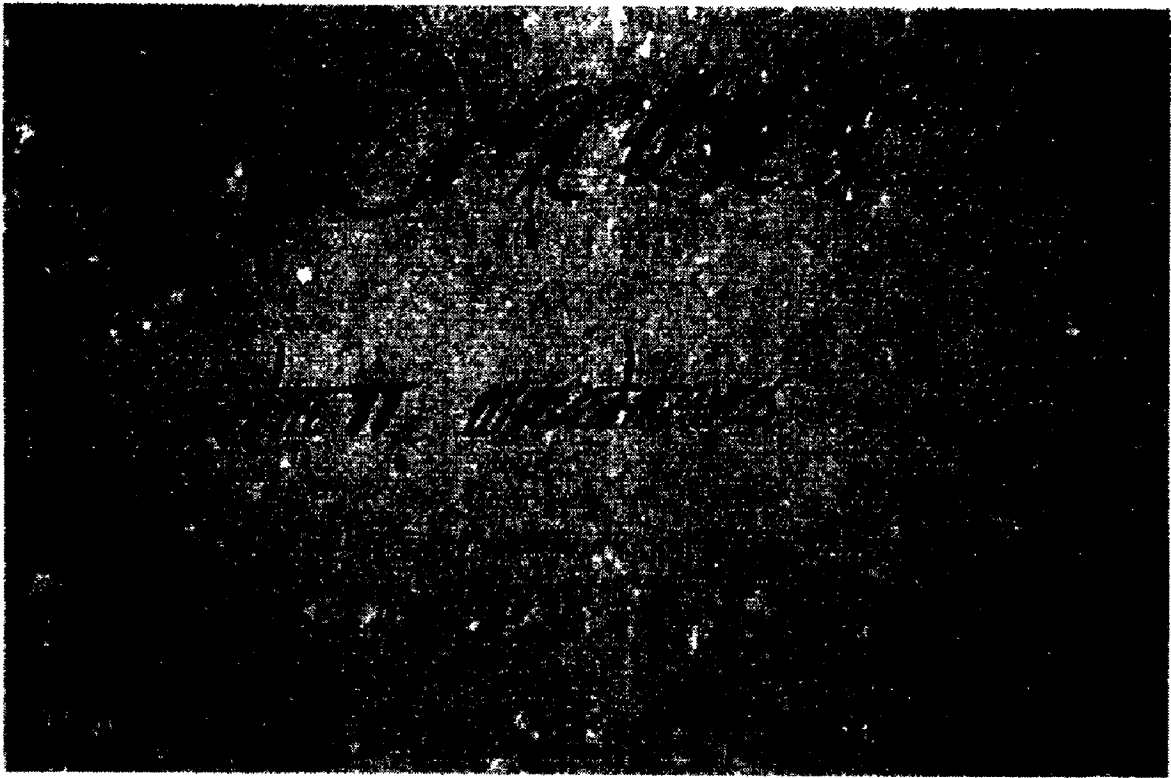
40 同氏所藏遺墨〈イロハニホヘト〉

"I ro ha ni ho he to", n.d. S. Uchiyama 53.2×56.3 cm



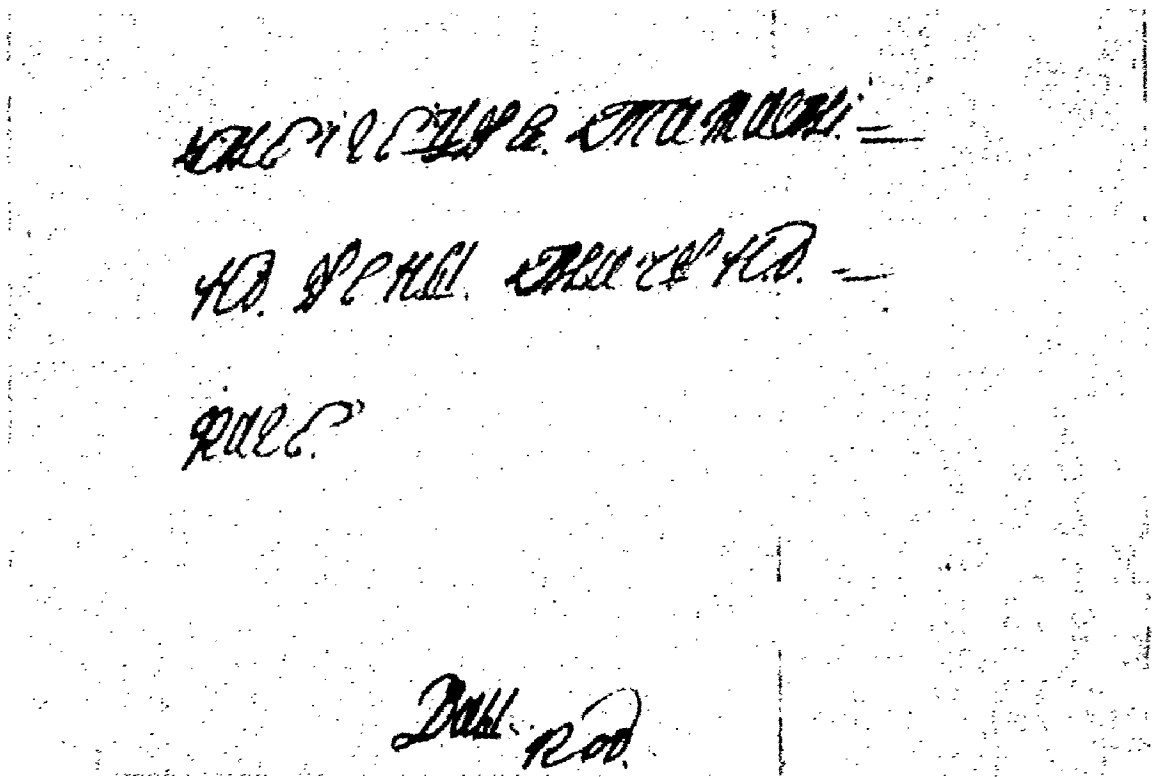
41 伊坂家旧蔵遺墨〈ヨタレソツネナ〉

“Yo ta re so tsu ne na ra”, n.d. From *Kawage-gunshi*, 1973 (rep.)



42 個人所蔵遺墨〈李白一斗詩百篇〉

A verse from Tu fu "Rihaku itto shi hyappen", n.d. 30.4×39.5 cm



43 河野辰雄氏所蔵遺墨〈名月やたたみのうへに松のかげ〉

A haiku by Kikaku "Meigetsuya tataminoueni matsunokage", n.d. T. Kōno
32.5×36.5 cm

YUKUSUEWA

TAGAHADAFUREN BENINO

HANA

Dai-ko.

- 44 早稲田大学図書館所蔵遺墨〈行く末は誰が肌触れむ紅の花〉

A verse from Hiraga Gennai's *yoruri*, *Shinrei yaguchino watashi*, 1770: "Yukusue-wa tagahadafuren benino hana" (originally a *haiku* by Bashō), n.d. WUL 8.8×9.1 cm

カメノカズ

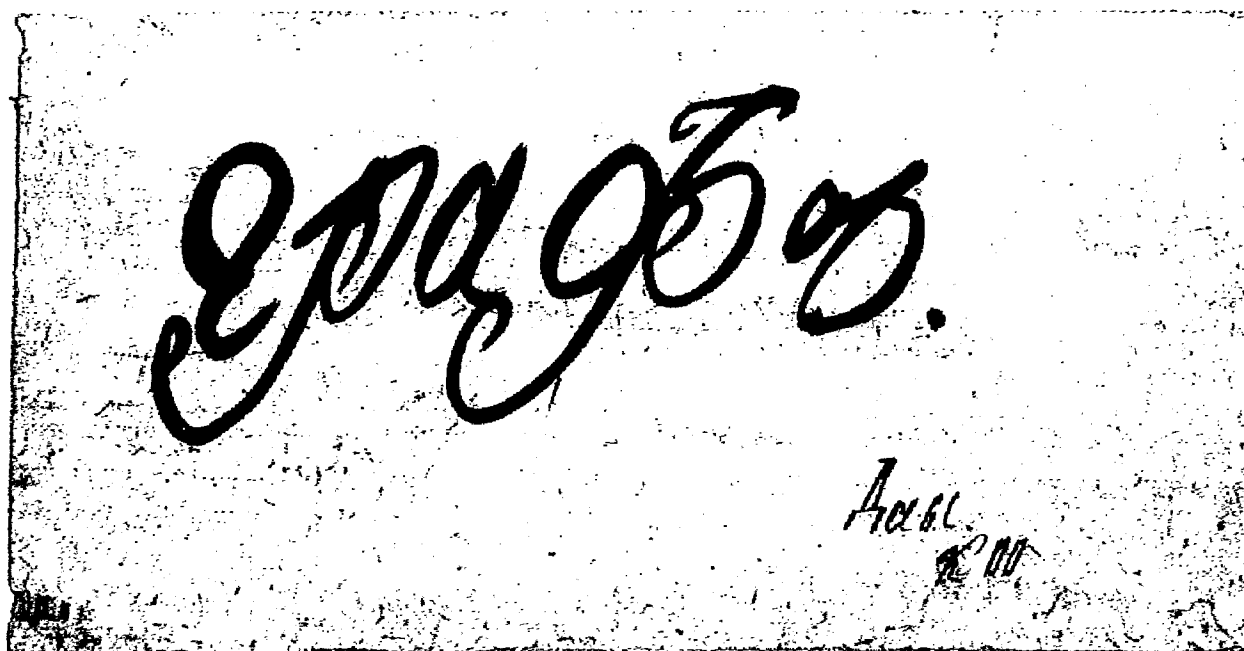
カメノカズノカズ

カメノカズノカズ

カメノカズノカズ

45 同上所蔵遺墨〈亀，長寿の嘉瑞なる〉

Familiar saying, "Kame, Chōzyu no kazui naru or Tortoise, it is a good symbol of longevity", n.d. WUL 11.5×10 cm



46 同上所蔵遺墨 〈графъ [伯爵]〉

The Russian word "graf", n.d. WUL 16.0×31.1 cm

(いわい・のりゆき 明治大学教授)